
消えた王妃と白銀の騎士

arco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えた王妃と白銀の騎士

【Nコード】

N5445Z

【作者名】

arco

【あらすじ】

よくある異世界トリップもののその後の話です。元の世界へ帰った女子高生本人は出てこず、残された異世界の住人たちの間で話は進みます。

子供の頃から良く知る国王に呼び出された主人公の女性騎士はとんでもない頼みごとをされる。「異世界へ行く自分の代わりに王となつてほしい」と。

国王の元婚約者である姉とその夫の騎士団長や侍女を巻き込んで、突然の災難に振り回されるしか能のない主人公の明日はどっちだ！

初小説・初投稿です。

生あたたかい眼でみていただけることを切に願います。

国王の乱心（前書き）

生ぬるい表現しかできませんので、タグは念のためです。
固有名詞は音楽用語ですが、音楽は一切関係ありません。出てきません。あしからず。

国王の乱心

1. 国王の乱心

幼いころからの付き合いで、気心の知れた人だと思っていた。

もちろん、相手との身分の差はよくわきまえていたし、何より忠誠を誓った主君であるのだから対等な関係ではない。だが、幼友達としてあちらからも親しくしてくれていたのでその思いは一方通行ではなかったはずだ。子供時代が終わるとソナチネの彼への気持ちは敬愛と、何より畏怖へと変わったが。

今、目の前で地面に膝をつき、肩を落とした背中を見ているとよく見知っているはずだという自負は急速に消えていき、一体どうすればいいのか見当もつかない。まさか彼と自分との間にはこんなにも深い 遠国にあるという神話の時代に神々によって作られた大地の大裂け目ほどの溝があるとは知らなかった。

ソナチネが立つのは、王室の私的な領域であるブリッランテ宮・王族が生活するための宮殿・中でも隅の隅、野趣あふれる草花が自然のままに伸びたという風情の素朴な庭園であり、目の前の彼、ペザンテ王国の国王・アレグロが過ごすには少々寂しすぎる風景だ。同じ宮殿の庭でも南にあるグランディオソ庭園は宮殿という言葉にふさわしく、幾何学模様を整えられた生垣と薔薇やカトレアなど美しい花々によって華やかに彩られているのだから。

国王アレグロは見た目だけを語っても完璧という言葉でしか表せない。青年神のような美しい顔立ち、目は空のような澄んだ水色、黄

金に輝く髪はゆるやかにうねり、肩口のあたりで切り整えてその美しい顔を飾っている。背は高く、均整のとれた体にはほどよく筋肉がつき、とまあ簡単にいうと、世の乙女の理想と妄想をこれでもかと詰め込んでみました という容姿だ。

人柄も（これまでソナチネが知るところでは）国王として何よりも国民を労わる慈悲深い政治を心がけ、また不正を行った官吏や貴族には厳しく対処することでも知られておりそういった相手と対峙するときのアレグロはまさに鬼神のごとき迫力を発揮していた。それでいて誠意を持って仕える者にはその温厚なまなざしと言葉でねぎらうことも忘れない。だからこそソナチネはそんな彼を人としても国王としても尊敬してやまなかった。

だが、彼が跪いているかの人のために建てられたという碑と、あの、彼女の飾らない率直な人柄のことを考えるとやはりここがふさわしいのかもしれない。今はもういない、彼女を偲ぶには。

彼女が彼のそばから消えて三月ほど経った。彼女はソナチネにとっても友達 - 畏れ多いことだが彼女のたつての願いでそう呼ぶ - であつたので偲ぶ思い出はたくさんある。その思い出を分かち合うことが自分にできること、と思いつつこの極秘の護衛任務の最初の日目を臨んだものだ。

なのに

今日も聴きたくない声が、言葉の羅列が聞こえる。できれば耳をふさぎたいが、建前上、ソナチネは彼の護衛なのでそんなことはできない。

「覚えているだろう？」コトネの声を。聴いているだけで心が震えるあの声…妖精のささやき声とはあのようなものをいうのだろうか。

コトネが何かねだつたら全てきいてやらなきやといやむしろ叶うべきだと思つたよ。おねだりなんて滅多になかつたが」

「どうして彼女の手を放していられたんだろう。一瞬でも放さずに四六時中手を繋いでいたら今も彼女はここにいたかもしれないのに…。手といえば彼女の手は美しかった。コトネは楽器を演奏するため手を大事にしていたと言つていたな。あの白くほつそりとした手を与えられた私は世界一の幸福も手に入れていたんだ…」

「コトネのあの艶やかな魅惑の黒髪をナデナデすると私の心のどこかが温かくなるんだ。あの感覚、それまではそんなものがあることすら知らなかつた…。コトネは私の知らない扉を開けてくれたんだ。忘れられない…」

こういつた思い出話？妄想？（もしくは呪い）を護衛という役目で傍を離れることを許されず、ただひたすら垂れ流されるソレを強制的に延々と聞かされるようになって二月半が経つた。国王陛下は政務で忙しいので相手をするのは夕暮れ前の一時間ほどだが、それは日課のように毎日のこととなっている。ただの思い出話としてきくにはあまりにも…甘いというか、重いというか、気色悪いというか。彼女本人がきけばもしかしたら気持ちが悪くなるのかもしれないが第三者の立場で聞かされるのは非常に居心地が悪くむず痒い。聞き流せればいいのだが、時々返事を求めてきやがるのだコレは。

これまでソナチネが抱いていた彼への敬愛や畏怖、憧憬は最初の半月が経過したころには雲散霧消した。同じ言葉を繰り返しているだけなら（それはそれで精神の異常を疑つたかもしれないが）耐えられたかもしれない。だが彼が彼女思ふ言葉は尽きることがないらしく毎日違うセリフがその麗しい口から飛び出してくるのだ。今では、

消えてなくなつた敬愛ではなく役目への義務感のみがソナチネをこの場に踏み止まらせている。

ナデナデのくだりで全身を虫が這うような感覚に襲われたソナチネはそのまま扉の向こうに行つてしまえばいいのに戻つて来なければいいのに、と本気で祈つた。

黒い気持ちに覆われた一瞬ののち、それまでの忠誠心をなんとか思い出し、恥じた。

忠誠心の方を。

ソナチネはペザンテ王国の第一王国騎士団に、いまは五名所属している女性騎士の一人である。当時の王太子の、現在の国王陛下の幼友達として選ばれるくらいなので彼女自身も生まれは由緒正しい貴族だ。ついでに二歳上の姉は目の前のへた「- 違つた国王陛下 -」の元婚約者だ。

そんな立場のソナチネが騎士となるまでにはいろいろと紆余曲折があつたのだが、彼女がこの道を志したその理由は、敬愛する（今は残念なことになっている）国王陛下に剣をもって仕えたいと願つたためだ。そのはずだった。

「 というのはどうだろうか? 」

いつしか己の分を忘れ、この背中を蹴り倒してしまいたい、という内なる切望と戦っていたので、その背中から久しぶりに自分へと言葉がかけられたことに、ソナチネは一瞬気がつかなかつた。

護衛についているのはソナチネ一人ではないが、ほかの人員は彼が人払いをしているので、少し離れたこちらからは目に付かないところにいる。だから今の言葉もソナチネ一人しか聞ける範囲おらず、当のソナチネも聞いていなかった。無礼を承知で聞き返すほかない。

「恐れながら、陛下。もう一度おっしゃっていただけますか？」

いつのまにやら彼は、膝をついたまま振り返ってこちらを見ていた。

「すぐには承服できないのはわかる。だがこれしかないのだ。嘘でも冗談でもなく私の心の底からの願いだ。私は真剣だ、頼む、受けてくれ。」

ソナチネが話をきいていなかったため聞き返したことがわかっていないのか、アレグロは自分の命令？申し出？が受け入れられなかったと勘違いし、きちんとこちらに向き直り真剣な顔で懇願している。今にも手をつかんばかりに。

いくら主君の願いでも、真剣に頼まれても、聞いてもいないことを「わかりました」と言えるほどソナチネは盲目的ではない。今は特に。だから彼の態度にあわて、自分も彼の前に膝を着き、もう一度ききかえした。

「失礼ながらきいておりますでした。陛下。申し訳ございません」

そう言うと、ソナチネが熱心に自分の話に聞き入っているものだとしても（オメデタクも）信じていたのか彼はかすかにムツとした顔をしたが、きいていなかったものは仕方がないと思い直し、先ほどの己の言葉を繰り返した。

「真剣な話だ。そなたに、私のあとを継いで国王になってほしい。」

「は？」

聞き返すべきではなかったのか、いやそもそも本来なら近衛兵の仕事である国王の護衛など断っていれば・・・

国王が発狂したのか、それとも「真剣だ」と言いながら冗談を言うようになっってしまったのか・・・

さまざまな思いがソナチネの胸に浮かんだ。

この時間をなかったことにはできないのだろうか。

国王の乱心（後書き）

書くのは楽しいものですが、素人の拙い文でお目汚しになったら申し訳ございません。

読んで下さったことに心から感謝いたします。

そもそもものはなし(前書き)

異世界トリップのストーリーをもものすごく雑にまとめてます。ごめんなさい。

そもそもものはなし

2. そもそもものはなし

三年前のことだが、コトネこと成沢琴音は突然このペザンテ王国に現れた。(琴音の世界では「いせかいとりつぶ」というそうだ。)
琴音は国王アレグロの私室(もつと詳しく言うと言室のベッドの中、無論彼が寝ているときに)に現れた。不審者として尋問されたが、当時の王国を歴史上最大の危機にさらしていた魔族の侵入を憂いた神官長による「神子の召喚」の儀式で呼び出された神子であることがすぐに判明した。

神官長や国の重鎮たちはこぞって彼女に魔族の掃討を依頼した。まだ16歳だったという彼女は当然というか全てを断り続け、むしろ元の世界に返してほしいと懇願した。その身勝手な依頼に怒りもしたが、神子の召喚の依頼条件である魔族の掃討を成し遂げなければ帰れないこと、彼女一人を行かせるわけではないことを懇切丁寧に国王アレグロが説明すると、しぶしぶ折れた。

その後一年ほどで見事に自分の(ムリヤリ押し付けられた)仕事を成し遂げた琴音だったが、本人が期待していたとおりすぐには元の世界へ帰れなかった。無事王都に帰還した後も、凱旋パレードを終えて神官長の祝福を受けた後も、「国境を越えてやってくる魔族の侵入をなくすこと」が召喚の条件であったので、彼女の力を借りて国王が魔族との間に「国境の設定と不可侵条約の締結」が成立させた時点で彼女は速やかに元の世界に戻るはずだった。神子の召喚は王国の歴史の中でも珍しいことだが前例がないわけではないのでこれは異常なことであることがわかった。

当然琴音は怒り狂った。発端である神官長に詰め寄ると、神官長はその地位を降りた。怒りの矛先に（無責任にも）あっさり辞められてしまうと、それ以上追求する気が失せてしまったのか、全てどうでもよくなってしまうたのか、元の世界に帰る方法を探すこともやめ、彼女はふいに滞在していた王宮の部屋から姿を消してしまった。国王アレグロはあせり、国中に彼女の搜索を命じた。この頃には心の底から彼女に惹かれていたのだ。

* * *

このあたりで、そもそも事の起こりの語りが終わっていればソナチネにとつてはまだ救いがあるのだが、残念なことにまだ続きがある。

* * *

姿を消して約三ヶ月後、琴音はアレグロの搜索網とは無関係に発見された。彼女が仕事を得た王都にある小さな大衆食堂へ宮廷に仕える文官が偶然立ち寄ることで見つかってしまったのだ。王都は彼女がいる可能性が一番高かったので1000人体制でもって探していたのだが、みな黒髪黒眼を目印にしており、金髪カツラをかぶるという単純かつ手軽な変装でももしろいようにダメさららしい。

そこからのアレグロの努力は涙ぐましかった。国王自ら琴音の元に赴き、王宮へ帰るように説得を始めた。毎日。いわく「彼女が家へ帰ることができなくなった原因は王国に、ひいては国王自身の不甲斐なさにあるのだから、彼女の生活の保障と帰還するための方法を探るという責任を果たさせてほしい」とのことという内容で。

（彼女を発見した文官は「詭弁だ！連れて帰りたいただけだろ」とつ

ぶやいた)

半年ほど説得し続けると、意志の固い琴音も(このころその片鱗を見せ始めていたアレグロの偏執狂さに根負けして)ようやく折れた。「ストーリーカーにほだされたみたいで嫌だなあ…」と彼女がぼやいていたといないとか)

(余談だがソナチネの姉でアレグロの婚約者であったソプラノは、このことを知るとさっさと婚約解消を申し出た。「これでやっと愛しの彼のところへ飛び込めるわ」と。)

フリーになったしこれで堂々と口説ける、と思ったのかアレグロはそれまでの遠慮(していたのか?)をかなぐり捨て、積極的に行動を開始した。もともと男前で誠実な態度をとってきた彼への琴音の中でのポイントは(不思議なほど)高かった。王宮の一室を与えられ、学生だったのだからと教師をつけられ、こちらの世界の歴史やその他礼儀作法・教養を身につけ始めた彼女を相手に、最初に直球で告白して即効フラれると、次には俺様態度で迫ってみたり、あるいは伝説の木の下に呼び出し告白してみたり(彼女曰く「どこのギヤルゲー…ていうか古い」)、また、ちょっと冷たくした直後に頬を赤く染めつつ「べっ別に好きじゃないんだからなっ!」と強がってみせたり(彼女曰く「今度はツンデレ?引き出し多いわねー」)。

さらに半年ほど経った頃、もともと悪くは思っていないが上には、迫られること自体がおもしろくなってきたのか琴音はついにアレグロの正式なプロポーズを受けた。彼は何をどう勘違いしたのか、「紐で繫いだコウモリを連れ、首にはニンニクを連ねた首飾り、黒いマントをはおり、両手には十字架と聖水、そして相手の首筋に口付ける」を彼女の世界の求婚の作法と信じ、実行した。退治する側だかされる側だか、判然としない彼の奇行がプロポーズだと知ると、

彼女は爆笑し涙を流しながら頷いた。

「もしかしたら私は明日にでも、突然もとの世界に帰ってしまうのかもしれないのよ？私の召喚条件は満たされているんだもの。あなたはそれでもいいの？」

「だったらなおさら、一分一秒でも長く一緒にいたいんだ。約束するよ、君がどこに行ってしまうても、私の妻は君一人だ。」

そう、たとえ琴音が式の前夜、元の世界へ突然帰ってしまうとしても

そもそもものはなし（後書き）

読んで下さる奇特な方がいたことに感謝します。

姉の見解

3. 姉の見解

「ノノちゃん、陛下のバカがまたひどくなつたよー」

前置きもなくいきなり泣きついてきた妹の姿に姉・ソプラノは「こりや相当追い詰めらてるな…」とため息をついた。呼び名も口調も幼いころのものに退化してしまっている。自分よりも随分と背の高い妹は、そう簡単に泣くようなヤワな娘ではないのに。

ブリッランテ宮の庭で起こった国王の突然の乱心に呆然としていたソナチネは、彼が他の護衛とともに宮殿の建物内へと戻っていった後もしばらくその場を動けなかった。ハツとしたのはいつの間にか日暮れの時間となった庭園のどこかでカラスが「カア」と鳴いたためだ。ソナチネの現在の勤務は日中の国王の護衛なので、このあと近衛の詰め所で今日の報告書を書いたら仕事は終わる。先ほどこちんと引継ぎできなかったことは気になるが、国王本人が何も言わなかったので大丈夫だろう。

勤務が終わったあと、騎士団の宿舎に帰らなかったソナチネは、姉の嫁ぎ先であるエネルギー家の屋敷を訪ねたのだ。

似ているようで似ていない姉妹である。二人とも燦然と輝くクセのない銀髪に大きな蒼い瞳、よく似た美しい顔立ちをしているが与える印象がまるで違う。

ソナチネは髪を耳の辺りで切りそろえており、筋肉のついたすらり

とした長身はどこから見ても強く凛々しい女騎士だ。顔つきにも鋭いものがある。

対して、ソプラノは長い銀髪を華奢な背中にサラリと流した、美しい儂げな深窓の姫君だ。妹と違い、華やかで柔らかい線の美貌を持つ。

二人はコン・フォーコ公爵家の姫君なのでソプラノの方が正しい姿だろう。性格の全く違う姉妹だが、昔から仲は良かった。

「で、何があったの？説明してくれないとわからないし、だいいちあなた不敬罪よ。たとえ事実でも口にはいけないわ。なるべくなら」

泣くばかりで要領を得ない妹を落ち着かせ、ようやく話を始めた。

「なるほど…ふうん、そうきたか」

何があったのか事の経緯を聞きだしたソプラノは訳知り顔でうんうん頷いた。妹が意味不明な国王陛下の趣味？呪詛？に付き合わされていることは以前から独自の情報網で掴んでいた。ただ、なにぶん意味不明なのと、現在ソプラノは王宮での地位も役職も特に必要としておらず、夫であるレント・エネルギー第一騎士団長に知らせても「特に問題ない」というばかりなので、この極秘情報は使い道もなく持て余していたのだ。

「どうしましょう！？ どうやったら陛下は元にお戻りになるでしょうか…」

一方、頼りにしている姉にこれまで極秘で誰にも相談できなかった内容をぶちまけてしまえたソナチネは、若干罪の意識を感じながらもホッとしていた。どの道こんな重要な話をソナチネが姉に黙って

いられるわけもないことはアレグロも知っている。

この姉妹、体力はあってもほんの少し頭の回転の鈍い妹ではなく、未来の王妃として厳しく躰けられ賢くしたたかに成長し、亡父が命じていた国王との婚約を権謀術数の限りをつくして見事に解消してみせた姉の方が、（今も昔も）主導権を握っている。

その美しく細い指先を、あごにあてて姉はのたまう。

「そうねえ…私が今言えることは、諦めなさいってことかしら？」

「はっ？へっ？」

本日二回目の予想外に再び言葉がでないソナチネ。

「女王は王国の歴史上でも初めてじゃないわ。悪くないと思うわよ？」

「正直、陛下が本格的に発狂する前に王位を継承しておいた方が無難よ。あなたの王位継承権の順位は決して高くはないんだから」

「あちらからの申し出なんだし、三ヶ月もあつたんだから準備は整ったってことだわ。最終的な用意ができたからこそあなたに話したんでしょう。おそらく」

「つちよ、姉上。何で」

ほんの少し頭の回転の鈍い妹は話しについていけない。それでも容赦なく、真実に近い推測を姉は話す。

「つまりね、ソナチネ」

姉は妹の、自分と同じ蒼く澄んだ瞳を見据えた。

「陛下はコトネを追って、彼女の世界へ行くつもりなのよ」

「コトネが帰還した後、魔術師長が連日王宮で何かを研究していたそうよ。陛下に命じられてね。たぶんコトネの世界に渡る方法を探っていたんでしょ。まったく…それができるなら最初からコトネを帰すためにやればいいのに。誠実そうな顔してホント最低。よっぽど返したくなかったんだわ。（ま、私もコトネに黙ってたけど。逃げられちゃ困るわ私が。）」

「行ったら帰っては来れないのよ。たぶん一人を送り込む方法しかないんだわ。帰りがあんならコトネをさらってすぐに二人で帰ってくればいいんだもの」

「よつするにあのバク、いや陛下、あ、やっぱりバカでいいか。バカは国を捨てる気なんですよ。で、代わりの王、と」

「は　　っ！！それがなんで私っ！！」

うん、姉にもキミの気持ちは痛いほどわかる。
だからそのバカ力で肩を握り締めないでほしい。お姉ちゃん妊婦なのよ。

姉の見解（後書き）

読んで下さる方が一人でもいたらいいなあ、と投稿しています。
ありがとうございます。

三者三様の夜 そのいち

4・三者三様の夜 そのいち

ソナチネはあその後、聡明な姉の衝撃的な考察を聞きながら、なかば機械的に夕食まで頂いてしまった。義兄であるレント・エネルギー第一騎士団長は在宅していたはずだが、話していた内容が内容だけに、姉妹水入らずにしてくれたい。食事の終わりの方には、話題は生まれてくる初子のことや団長のとのノロケ話など、姉の現在の関心事へと変わっていったのだが。食事が終わるやいなや、耐え切れずソナチネは姉の屋敷を辞した。

夜も更け、ソナチネは王宮の第一騎士団の宿舎の中に与えられた己の部屋に帰った。現在、国王直々の命令でソナチネは近衛隊に属し彼の護衛任務にあつたっているのだが、本来彼女は義兄が団長を勤めるこの第一騎士団の騎士だ。入り口の詰め所や娯楽室から何度か同僚に声をかけられたが、生返事しか返すことができなかった。ソナチネの部屋は二人用なのだが、相室の同僚は勤務中らしく誰もいなかった。灯りもつけずに寝台へ靴を脱いで上がり、膝を抱えて座りこむ。

どう考えても無理だ。自分が王となつて国を統治するなど不可能に等しい。今までソナチネの生きる道は、守るもののために自ら剣をとって戦い己を盾とすることにあつたのだから。政事のことは何一つわからないし、人の上に立つ器でもない。認めたくはないが、21歳にもなれば自分の頭の程度などよくわかつている。姉のような知性も（悪賢さも）ないし。

これまでさんざん陛下の奇行にドン引いてきたが、彼をバカになどしてはいけない。早くに先の国王を亡くし、まだ子供の年齢である

17歳で王位を就いた彼は、若いながらも手堅い治世を行ってきたのだ。その頃のソナチネはというと、騎士になるために見習いとして第一騎士団へ入団し、他の少年達につまはじきにされながらも必死で新しい生活になじもうとしていたので、幼馴染の彼がどんなに苦労して足場を固めていったのか少しも知らなかった。

また、こんなポッと出の女騎士を国王にすることを周囲が認めるはずもないのだ。自分のような無知な人間が上に立つのでは、確実に国は混乱する。魔族の侵入という国難が去ってまだ二年ほど、これ以上民を不安にさせてはいけない。

五回ぐらい同じ思考をループし、時間は深夜を大きくまわった頃、剣だこで硬くなったその手を握り締めソナチネは腹を決めた。

やはり、断ろう。むしろなかったことにしてしまおう。国王の前ではシラを切りとおす。これしかない。できるはず、いや、やらねば。考えすぎて、姉のせつかくの忠告や考察はすでに頭から抜けていた。

やっぱりそうはいかないことをソナチネが知るのは翌日のことなので、単純な彼女はこれで安らかな眠りにつくことができたのだった。

たぶん、もうちょっと悩んだ方が、いい。

三者三様の夜 そのいち（後書き）

お時間を割いていただき、ありがとうございます。

三者三様の夜 その二

5・三者三様の夜 その二

ソナチネが一人、思考のループをさまよっているころ

その姉も広い夫婦用の寝台の中で妹に降りかかった災難（考えようによっては僥倖なのだ）とその元凶について思考をめぐらせていた。寝つきのいい夫は隣ですでに熟睡状態だ。

（……あのこに国王が務まるとはカケラも思えないんだけど）

あの幼馴染の変人国王がどんな手を打ってくるのかわからない。元婚約者だが、まわりの者たちが思っていたほど、二人の仲は打ち解けたものではなかった。婚約中はその地位を差し引いたとしても、周囲が羨望の眼差しを向けたほど見た目にはお似合いの二人だった。婚約を交わしたのは二人が8歳の頃、死んだ父が強く薦めた話で身分も年齢も丁度よかったことと、幼くしてすでにソプラノの美貌と聡明さが有名だったのとでトントン拍子にまとまった。早くから馴染ませようとしたのか、婚約が整った後に妹と二人でよく王宮に上がり、王子だった彼の遊び相手をさせられた。この頃から活発で屋外で体を動かすことを好んだ妹は、王子とその他の男の子の遊び相手達に混じり、木に登ったり、「冒険」と称して王宮内を駆けずりまわったり、抜け道を見つけて王宮の外に王子と一緒に出歩いて大目玉をくらったりしていた。が、自分はどういうと、男の子に混じって外に遊ぶなんて野蛮なことできるもんですか！と、将来の姑である王妃のもとを訪れ、苦笑する王妃付の侍女から行儀作法を学んだりしていた。…かわいげのない子供だった。

思春期に入り、遊び相手ではなく婚約者として二人で会うようになると、とたんにきまづくなった。それまで妹を介していたためか、二人で何を話せばいいのかわからなかったのだ。二人とも頭が良いし共通の興味がないわけでもないのに、いつも不思議と会話に詰まった。ソプラノは10代前半にして社交辞令の天才であつたし、彼の方もそのあたりの教育は不可欠なのだから話の接ぎ穂が見つからないような失態を見せるはづがなかった。気がついた頃には、彼と会うことそのものが重荷になつていた。

(今思い出してもあの重苦しい空気はトラウマだわ…)

夫と出会つてからわかつたことだが、王子と自分は恋をしたことなど一度もなかった。人間らしい暖かい会話をしたことがなかった。一生を共にする人なのだから距離を近づけなければ、とあせればあせるほど言葉が空回りしていった。

婚約解消し、周囲の期待がはずれホッとした後になつて、彼との間にあつたあの重苦しい空気の正体を理解した。重かつたのは二人の間にあるものではなく、周囲の期待・羨望・嫉妬…外野から向けられる感情だつた。将来の王妃として自分を鍛えてきたつもりだが、その努力はいつしか婚約者のためではなく周囲に応えるためのものになつていったのだ。そんな彼女の様子に彼も気づいていたのだろう。うまくいくはずがなかった。

結婚式は二人が国の成人年齢である18歳になつたとき行われるはずだつた。が、17歳のときに先の国王陛下が身罷り、その喪に服し、また若くして王位につかなければならなくなつたアレグロには、翌年に結婚式を挙げるといふ余裕はなくなつた。それでは20歳になつたらという話になつていたのだが、間の悪いことに今度はソプラノの父公爵が亡くなつた。喪に服するため、再び一年延期になつた

結婚式は結局もう一度延ばすこととなった。

魔族の侵入が明らかとなり、国中がそれどころではなくなったためだ。

そしてアレグロとソプラノの結婚式は、そのまま永久に挙げられることはなくなつた。

コトネには悪いことをしたと思つてゐる。それでなくても気の毒な身の上の彼女を、自分の自由のために利用したのだ。だが、コトネに対するアレグロの執着に気づいたとき、期待してしまう自分を止められなかつた。

だから失踪したコトネが王宮に戻つてきたとき、この機会を逃せばもう次はないと思ひ婚約解消を願ひ出た。心の底から慕う人・今の夫・をどうしても諦めきれなかつたから。コトネの気持ちは・・・考えなかつた。考えていたら実行には移せなかつただろう。

婚約解消を願ひ出た後、ソプラノは王宮にあがることを一切やめた。国王との縁談を自ら破談にした女が王宮にいては周囲がきまずい。だが、ソプラノは何よりコトネの顔を見るのがつらかつた。もし、コトネがアレグロにもこの国にも嫌悪感を抱いていたら？戻つたのも、自分を虜囚だと思つてのことだつたら？ そう考えたらとても会いにはいけなかつた。

コトネがアレグロの求婚に応じたときいた時は、たまらずコトネの顔に見に行つた。影からそつと見たコトネの笑顔は心の底からの喜びに輝き、晴れやかだつた。

(あの笑顔に救われた…あの二人には幸せになつてほしかつたわ…)

だから、陛下がコトネを追いたいのなら協力しようと思つた。自分だけが幸せになつた負い目もある。あのソナチネが女王というのは姉としても恐ろしいが、そこはこの自分が全力で支えようと決心し

た。妹に言った「諦めなさい」、あれは自分にとっても決意表明だった。

(それにしてもねえ…)

鈍い妹は未だに気づいていないだろうが、王位継承権は本来なら姉であるソプラノの方が上だ。さらには、彼女ら二人には早世した兄がおり、忘れ形見となった甥が王都ではなく公爵家の領地であるリゾレート地方の館に暮らしていて、母と義姉の手で育てられている。王国の法では継承順はこの現公爵である甥ラルゲットが優先される。また、王族の血を引くのはコン・フォーコ家だけではない。アレグロとその父・先王は一人っ子だったが、先々王の王弟がコン・ブリオ公爵家を継承し今に続いている。コン・フォーコ家はさらに前の王の代の王妹の降嫁によってその血族に連ねるようになった家系なので、こちらも王国の法ではコン・ブリオ家が優先されるはずだ。

(今って第何位くらいだったかしら…ブリオ家も色々あるし…)

とにかく相当強引に進めなければ、ソナチネへの王位継承は難しい。そもそも何故ソナチネなのかという疑問も残るが。

一体どんな手を使うのやら、と意外に苦労性な姉は前途を思い悩みながら眠りについた。これは胎教によくないわ、と頭の端で考えながら。

三者三様の夜 その二（後書き）

ひまつぶしになれば、幸いです。
ありがとうございます。

三者三様の夜 そのさん

6・三者三様の夜 そのさん

そして爆弾発言をかましたバカ、もとい国王アレグロはというと

やはり彼も眠れぬ夜を過ごしていた。彼のは自業自得なのだが。

国王の私室には煌々とした灯りがついていた。この灯りはコトネが消えてからは毎日、深夜まで消されることはなかったものだ。居間に置かれた長椅子に腰かけ、彼はため息をついた。憂えたようなその姿はどこから見ても麗しい美青年だ。

(とうとうここまで来た　あとはソナチネがうなずくまでにどのくらいかかるか、だな)

ソプラノの読みどおり、案の定、彼の目論見は九分九厘まで完成しており、残すはソナチネ本人を説得するのみとなっていた。

(長かったなあ…三ヶ月、コトネに会えない日が続いたとは。よく保ったものだ)

よりによって結婚式の前夜に元の世界へ帰ってしまうとは、アレグロにも予想のつかないことだった。そのまま発狂してもおかしくないほど、彼は深く嘆いていた。

コトネに初めて会ったのは隣にある寢室の寝台の中　今、彼はそこで一人寝することに耐えられないでいる　だった。もちろん不審者

だと思い、すぐに人を呼んで自ら尋問した。忽然と現れた彼女に、もしや魔族の間者ではと疑いを抱いたのだ。

だがそこに、国難をなんとか解決しようと深夜に一人こっそり「神子の召喚」の儀式を行い、何を間違えたのかよりによって神子を国王の私室に現れさせてしまった神官長が駆けつけ、誤解であることがわかった。

神官長の独断だったとはいえ、彼女の意思を無視し、無理やり召喚した事實は、国王であるアレグロも責任があることだ。まさか本気で、王国とは縁もゆかりもない上にまだ16歳の子供である彼女に命がけとなるかもしれない使命につかせるつもりはなかった。

彼はすぐに魔術師長へコトネを元の世界に返す方法を探すように命じたが、応じられなかった。魔族への対応に追われ、そこまで手がまわらないとのことだった。また神官長から「神子の召喚」では神子は召喚された時の「条件」を満たさなければ帰れないという進言もあった。自分たちだけで解決してしまうと神子の「条件」も満たされない可能性があるとも。それがわかっていて何故実行した、と神官長に怒りがわいたが、彼もこれほどまでに若くいたいけな少女が召喚されるとは思っていなかったようだ。

結局、コトネには形だけでも魔族の掃討について来てもらわなくてはならなくなり、アレグロは自ら彼女の説得に向かった。わけの分からない状況に突然投げ込まれ（何しろ最初は成人男性の寢床の中だ）、非常に混乱し怯えて泣いていた彼女に会うのは正直気が重かった。

だが、数日ぶりに会うコトネは思いのほかしつかりしていた。神子である彼女にさまざまな人間が会見を申し込んでいたらしく、彼女はそれらを拒絶することもなく受け入れ、気丈にも短い間に彼女なりの知識を蓄えたようだ。神子としての使命は断り続けているそう

だが。

(若いのに中々しつかりしている、と言うと「私ベンゴシ志望なので人の話をきちんと聞くことと話し合うことを大事にしているんです」と返された)

アレグロがさっそく魔族の掃討への同行を申し入れると、彼の話をきちんと聞き、理解したその上でコトネはやはり断った。それまで高位の大臣や神官長、魔術師長に対していたのと同じ言葉、「ムリ」の一言でばっさり。

「どうしてだ？このままでは帰れないんだぞ？」

「第一に、私の意志に反して拉致した相手のために命をかける道理はありません。また、私を元の世界に返すのはあなた方が当然負うべき責任であって、私自身があなた方のために何かをするかどうかはこれとは無関係です。第二に、私はこの国がどうなるかと関係ないです。どうして自分たちの問題を全くの他人である私に押し付けるのですか？第三に、私はあなた方を理解も信用もしていません。私が神子とやらの使命を果たさなければ帰れない、または使命を果たせば帰れるという話をどう信じればいいんでしょう？どうやってその話を保証してくれるんですか？第四に、魔法使い？魔術師？どつちでもいいですけど、魔法を使える人がいるならその人に私を返す方法を探してもらおう方が私としては楽です。ものすごく」

冷静な口調で立て板に水のごとく反論され、帰るためと言えば協力してくれるだろうと考えていたアレグロは、その日はすぐに退散するしかなかった。

次の日からアレグロは毎日説得に向かった。

意志に反して連れてきたことはひたすら詫びることしかできないが、彼女の身の安全は彼の責任で必ず守ると約束し、国の窮状と魔族に

侵略されている民の現状をこと細かに説明して同情を誘い、神殿にある持ち出し禁止の古文書を特例でコトネの元に運び（コトネは神子の力？でこちらの言葉を理解してしゃべれた上に古文書に書かれた古代文字まで読めるようになっていた）どうして神子が使命を果たさなければ帰れないかとこれまでに召喚された神子が使命を果たした後どうやって帰ったのか詳細を説明し、魔術師長がどれだけ必死になって魔族の侵攻を防ごうとしているかをふくよかだった彼の体重が半減し顔つきまで変わっていった経過を語ることで納得してもらった。

そして…

「こんな申し出は君に失礼かもしれないが、対価を支払うというのはどうだろうか」

「対価？」

「ああ、君の世界とは貨幣が違うだろうからこちらの金貨などもらっても困るだろう？宝石や黄金などなんでも君の望む形で、君が自分の命の価値に見合うと考える分だけ支払うよ。国庫にも限りがあるから途方もない量だと困るが。持って帰れるように神官長や魔術師長に相談してみよう」

「…やっとまともな話ができましたね。」

「…え」

「私だつていつまでも他人事にしてられないことぐらいわかってます。今ここにいるんですから。私は未成年で学生で、自分で稼いだことは一度もないですが、正当な報酬を示されたら領けなくもないんですよ、陛下」

「神子は人柄さえも高潔で、金銭を示されたら不快に感じるかもしれない」と勝手に考えていたアレグロは脱力しながらも安堵した。これで駄目なら力づくしかない、となっていたのだ。双方のためにも、良かった。

また、このとき初めてアレグロは神子としてではなくコトネ自身に人格があること（当たり前だが…）を認識したのであった。

ことごとく失敗し、国王の説得を固唾を呑んで見守っていた大臣や神官長や魔術師長たちもこれでようやく前へ進める、と喜んだ。

実は真剣な表情で毎日コトネの元に通う国王の姿を見て、王宮に仕える侍女たちが「これは三角関係の予感…！」と噂し、その話がよりによってソプラノのところに届き、彼女にほのかな期待を抱かせる、というオマケもついた。

遠征に赴く前に、コトネは「神子の力」を授かる儀式を神殿で受けなくてはならなかった。その力がどんなものであるかは、戦地へ到着するまで国王と神官長以外には秘されていた。

やがて、コトネを連れ王国軍をアレグロ自ら率い、王都を出発し魔族の現れた王国の西部へと遠征に向かった。当初、魔族との戦いは熾烈を極めると予想されたが、最終的には神子の力・「話し合い」
- 相手がどのような精神状態・健康状態でも話し合いのテーブルに強制的につかせる力 - によって、双方の納得がいくような国境の設定と不可侵条約の締結にこぎつけることができた。直接魔王 魔族をまとめていた者 と話し合ったのはアレグロだった。身の安全を守るという言葉どおりコトネは神子の力を使った後はすぐに後方へ移された。

（言葉では突き放すようなことしか言わなくせに、よく周りを気遣っていたな…）

魔族に話し合いをさせるまでに、武力による小競り合いが幾度か起こり、騎士団・歩兵団・魔術師団が実際に交戦していたのだが、コトネはその戦いで傷ついた怪我人がいる救護所の手伝いをした。学生である彼女に医療の専門知識などないので看病のために傍に付いたり、見よう見まねで包帯を巻いたりなどの簡単なものだが。不承不承ながらも、目の前にいる傷ついた人々を見捨ててはおけず、労わる姿にアレグロは感心した。彼女は自分で言っているほど、己の利益のみを追求するような人間ではない、と。

双方の落としどころを探しての話し合いは、終わるまでにかなり時間がかったが、コトネの活躍もあり、魔族との問題は解決したが、王宮に帰り、新たな問題が発生した。

コトネが元の世界へ帰れないのだ。

（自分では気づかなかったが、私は彼女の姿が消えなかったとき喜んでしまった…）

それがコトネにとってどんなに残酷なことか、考えもせず。

神殿にて神官長の祝福を受けたコトネは、以前の召喚ではここで神子の体が徐々に消え、元の世界へ帰っていったというその光景を描いた記述があったので、次の瞬間には自分が元の世界に戻っているもの、と予想していた。

が、コトネの体に変化はなく、彼女が立っているのは相変わらず異世界の神殿。起動までに時間がかかるのかなーと思い、彼女はそ

まま立ち尽くしていたが、一時間経っても半日経っても変化は起こらなかった。

(自分が帰れないと理解したときのコトネの顔：あんなに絶望している人間の顔は知らない)

自分たちはなんて残酷なことをしてしまったのだろう。暗くなった神殿で、絶望したコトネの顔を見て初めて彼女が自分を信頼し始めていたと知った。その信頼を裏切った瞬間だった。

コトネはすぐに神官長へと詰め寄った。話が違う、と。

「どうして私はここにいますでしょうか？」

「あなただけじゃない。皆いましたよね？魔族さえいなくなれば私は帰れるって。嘘だったんですか？」

「あんないかにもいわくありげな古文書まで出してきて私をだましたんですか？国ぐるみで？いい大人が16歳の子供を？」

「だって帰れるって言ったじゃない！！どうしてよっ！帰してよっ！！」

「私にだって家族もいるの！友達も学校も

…皆のところへ帰して。お母さんに会わせて！」

最初にこの世界に来たとき以来のコトネの涙だった。この国を救った神子とは思えない弱々しくも痛々しい、普通の少女の姿だった。この一年我慢し、張り詰めていた糸が切れたのだろう。

その後、神官長がその地位を辞した。もともと高齢だったのだが力の見合う後継者がおらず無理をしてその地位に留まっていたので誰も反対しなかった。神官長の務めから開放された余暇を使い、コトネを戻す方法を探すつもりだそうだ。

神官長がいなくなると、コトネは引きこもるようになった。王宮に

与えられた一室に閉じこもり、誰にも会わなくなった。遠征前から仲良くしていた侍女たちも、遠征中に知り合って友達になったというソナチネも遠ざけて。

そして　消えた。

いつ見つけたのか、王族の脱出用通路を使つて。

アレグロは彼女が実際に目の前から消えて初めて、悟つた。自分がコトネに向ける思いに。強くて弱い彼女にどうしようもなく惹かれている。頑固で容易に自分を譲らないところも、意外に脆い部分をもっているところも愛おしい。彼女がいけないことには耐えられない。だから必死に探した。見つけたときは心底安堵した。

遠征中、用がなくとも一日一回は彼女に会いに来ていた彼の思いは周りにはすでにバレバレだったが、本人は自分の行動には無自覚だった。

（「じーっとコトネ様のこと見てるんだもの、こっちがかゆくなつたわよ！」とは傍にいた侍女の談。）

（最初にいなくなったあの時と同じ状況だが、違う。今は彼女も私を求めているはずだ…）

何度も試みた求婚に、ついに応えた彼女はあんなに幸せそうに微笑んでくれたのだから。

（妻を取り戻すためだけに、国を捨てる、か…最低の国王だな）

（しかし約束したのだ。私の妻はコトネ一人。王妃を娶らぬ私がこのままでは、王位継承が宙に浮くことには変わらない。だから…）

愛しい彼女の傍へ行くことを願い、国王は今夜も眠れぬ夜を過ごす。

三者三様の夜 そのさん（後書き）

自分で書きたいものを書いてますので、誰向けなのかよくわかりません。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

義兄の憂鬱（前書き）

7話が抜けてました。

サイトの使い方が理解できてなくてすみません。

義兄の憂鬱

7・義兄の憂鬱

国王アレグロのトンデモ発言の翌日、ちょうど非番であったソナチネは頭の中のモヤモヤを発散すべく、騎士団の鍛錬場へと足を運んだ。まことに体育会系らしい行動原則である。

朝も暗いうちに起き出して鍛錬を開始している騎士や従騎士たちが、活発にそれぞれに課せられた剣や槍・体術を競い合ったり、あるいは各自の武具の手入れなどを行っていた。騎士の武具は小姓が手入れをするが普通だが、己の手でこなす者も中にはいる。

第一騎士団の主な任務は王都の治安維持と王宮の防衛である。地方に駐屯し、国防や国王直轄地の治安維持を行うのは第二騎士団から第五騎士団までで、それぞれ大体国の東西南北に置かれている。また、地方の統治を行う領主たちは国が定めた基準を超えない範囲で私兵を雇うことが認められている。

騎士たちは普段、各自に割り振られた任務につく日と、鍛錬を行う日と、非番の日を組み合わせた予定で動くことになっている。騎士の中でも小隊長以上は事務仕事も担当することになる。今のソナチネは歩兵隊の一部である近衛隊に所属しているのだが、同じように決められた予定に沿って日々を過ごす。

同僚や後輩に声をかけながら鍛錬場を歩き過ぎ、ソナチネは三ヶ月前までは同じ小隊に属していた先輩であり友人でもある人物の姿を探していた。少し年上で剣の腕前も上の彼女に相手を願おうと思っただの。 (別に同性でないといけない理由はないのだが、近衛にいたり団長の義妹だったりと微妙な立場のソナチネに気安くしてくれる人もあまりいない。)

確か彼女は鍛錬の日だったはず、と探していると向こうが見つけてくれた。

「ソナチネ！おはよう。今日は非番じゃなかったの？」

声をかけてきたのは、女性としては長身の部類に入るソナチネよりもさらに背の高い女騎士であった。くせのない長い金髪を一つに束ねて流し、鍛錬用の服の上に防具をつけたその姿はソナチネ同様ほどよく筋肉がつき、スラリとして美しい。

「おはようございます。フィーネ。実は相手をしていただきたくて……」

ソナチネも挨拶を返す。フィーネと同じような服装で準備してきたソナチネは早速手合わせを願った。

熱心な後輩に笑いかけ、フィーネは快諾した

「いいわよ。準備は済んでるんでしょうね？」

「はい」

それぞれ訓練用の剣を握り、鍛錬場に設けられた剣術の試合用サークルに入り、一礼して構える。こうなるとソナチネは剣のことしか考えられない。何合となく打ち合いながら、瞬くように時間はすぎた。

「はあっ、ありがとございました」

「どんだん腕を上げるわね、ソナチネ。今三本に一本はとられたかしら？」

太陽が高くなってくる頃まで、途中で休憩を挟みながらだが夢中で剣を振っていた。気がつけば心にかかっていた懸案も頭から抜け落

ちた。まわりにいる騎士たちの視線にはかまわず、ソナチネは鍛錬場の隅まで歩き、少々はしたないが大の字に寝転がった。隣ではフィーネが汗を拭いている。

「で？」

「？で、とは？」

「とぼけないの。今日おかしいわよ。あなた、ほとんど夢中で剣を振るってたわ。何か悩みでも？」

その瞬間、ソナチネは思い出した。目下の悩みを。

「…そんな顔色変えるような悩みなの？きいちゃきけなかったのかしら」

自分の言葉で、極限まで体を動かして真っ赤に紅潮していた顔を一瞬で真っ青に染め替えた後輩を見て、フィーネは少し後悔した。若いのに浮いた話の一つもない彼女のことを実は心配していたフィーネは、「ソナチネについて春が！？」と先走っていたのだ。そういえば彼女の今の任務は国王の護衛。何かきいてはいけないことでもきいてしまったのかもしれない。（当たらずとも遠からずである）

「いえ別に…」

言いかけたソナチネを方向からの声が遮った。

「騎士コン・フォーコ様はいらっしゃいますかっ！！」

声の方を見ると、訓練服のむさくるしい男ばかりの風景に場違いな者の姿がある。煌びやかな衣装をまとった国王の侍従の一人だ。

大体用件を察したソナチネは力なく立ち上がり、手を上げた。

「はい…ここに」

「陛下より書簡をお預かりしています」

国王の書簡を預かった正式な使いである侍従の前に膝をつき、臣下の礼で書簡を受け取る。国王個人の印章を押された封蝋で巻きとめられた書簡を渡すと、煌びやかな侍従はさっさと姿を消した。書簡を手に言葉を失くしたソナチネを残して。

これは根堀り葉堀りきいてはいけないことだ、と察したフィーネは声をかけられなかった。

開けたらそのまま捕まってしまう、そんな予感に襲われたソナチネに追い討ちをかける者がいた。第一騎士団長の副官を勤めるジュストだ。

「コン・フォーコ。団長が呼んでるぞ」

ああ、もう少し考える時間をください。

(これでも少しは考える時間が与えられていたのだが、それを勝手に鍛錬にあてたのはソナチネだ。)

「…では失礼いたします。今日はありがとうございました。」

相手をしてくれたフィーネに一礼し、悄然とその場を去る。

フィーネは深刻そうな様子の後輩にかける言葉もなく、心配そうな顔でその背中を見送った。

* * *

第一騎士団の団長室は魔窟だ。ついでにそこには魔王がいる。

この冗談は騎士たちの中で言い尽くされたものだが、そこには真実がある。

（魔族の侵攻がおこった当初は縁起でもない、と言われなくなっていたが）

魔王ことソナチネの義兄、レント・エネルギー第一騎士団長はその物騒な二つ名の由来となった眼光を普段の1・8倍強く、眉間の皺を1・5倍深くして義妹を迎えた。30代後半にして23歳の若く美しい花嫁をもらった彼は、もっとウハウハしているべきなのだが、そんな可愛げは微塵も見せない。

いつも思っのだが、姉上はこの人のどこがいいのだろう、眉間を見るときもなしに見ながら心の中でつぶやく。

「昨日は顔も見せずに悪かったな」

「いえ、義兄上。こちらこそご挨拶にも伺わず申し訳ありません」

前置きもなくいきなり私的な件で話しかけられて、ソナチネは面くらった。

通常の彼は公私をはっきり分ける人間である。少なくとも王宮内で義妹扱いされたことは一度もない。だから思わずいつもは使わない呼びかけで返してしまった。

「ああ、いい。…用件はわかっているな」

「…はい」

そのまましばし無言のせめぎ合いが続いた。ソナチネは団長用の元は立派だった机。今はなぜだか無数の傷がついている。の上に積み上げられた決済待ちと見られる書類の山の間から睨み付けてくる義兄の前になす術もなく立ちすくんでいた。

「あの…」

「誰かいないのか。その…なんだ。」

「は？」

勇気を出して発言しようとしたソナチネを遮っておきながら結局は言いよどむ義兄。

誰か、とは何か用事でもあるから人を呼べとの意味かと受け取り、ソナチネは聞き返した。

「？ 何かご用事でも？」

「違う…。その前に、陛下の書簡は読んだのか？」

「まだです。さきほど受け取ってそのままこちらに呼ばれましたので」

陛下の書簡についても知っているのか、と驚きながら、そういえば目下の懸案事項についての呼び出しだろうと見当をつけておきながら、肝心のこれを読んでおかなければ意味がなかったと気がつく。

「あの、義兄上もご存知ならここで読んでもかまいませんか？」

「ああ。…そうしてくれ」

今までので限界かと思っていたが、眉間の皺がますます深くなる。

書簡の封蝋を取り、紙をシュツと伸ばして読む。

「…今日も陛下のところへ伺つようと書いてあるだけですが」

「二枚目があるだろう」

あらま本当に、と二枚目を読む。

「…意味がわかりません」

修辭的表現が多くてわかりづらいが、これは舞踏会への招待状らしい。招待主は国王その人ではなく大臣の一人で会場はその招待主の邸宅だそう。ついでに開催日は明日だ。それはわかるのだが、何故国王からの書簡に入っているのだろう。

首をかしげていると、ため息をつかせてしまった。

「全部説明しなくてはならんのか…それはお前の夫を決める舞踏会だそうだ」

「…へ？ 夫ってなんですか。今一体何がどうなっているんですか！？もう昨日から私にはわけがわからないことばかりなんですがつ…！！！」

「落ち着け。陛下がご乱心なのはもうわかってるな？今あの方は本気でお前に譲位なさるおつもりで用意をしておられるのだ。陛下がおっしゃるには、さすがにお前には一人で女王となる器はないから、後ろ盾となるような人間を夫に迎えさせたいそうだ」

度重なる理不尽に魔王の御前であることを忘れつい激しくまくし立ててしまうソナチネと、なだめる魔王。

「いやいやいやいや、おかしいですって！譲位？冗談ではないです

「！！ 全力で止めましょうよ、臣下なら！！」

「無論だ。このような話を受け入れられるはずがない」

「ん？はい？」

さらに興奮したところで、あっさりと肯定され拍子抜けする。

「だが、今の陛下の行動をお止めするのは難しい。この件以外の政務はこれまで通り滞りなく進めておられるそうだし、魔術師長にさせている研究も、名目上ではコトネ様を呼び戻すため、となっていてそうなのだ。私やお前に話している内容は、表立ったところには出されないし、下手にこちらからこの件を表ざたにして陛下の乱心を問題にしてみる、悪くすれば反逆罪であつという間に首と胸が離れるぞ」

「そんな…」

この件の深刻さを思いやり、再び青ざめるソナチネ。一気に命の危険にまで及んでしまった。

「腹心の者に魔術の詳細とお止めする方法を探らせている…陛下を行かせるわけにはいかないからな。実力で止めさせるしかないだろう」

眉間の皺も深くなるはずである。妻と違い生真面目な彼は「はい、そうですか」と主君の出奔を認めるはずもない。数日前に国王本人から相談を受けた彼は密かに頭を悩ませていたのだ。

（相談？もちろんソナチネの夫に関してだ。騎士団長ではなく義兄として訊かれたらしい。王宮にいる一番近い彼女の縁者が義兄であ

った、と。」

国王がこの件の協力者として挙げた大臣数人と魔術師長にすぐに会いに行つたが、全員国王の味方らしく、止めさせるつもりはないと言われた。

「もし仮に、だ。陛下が異世界へ行つてしまったとしても、お前が女王に、ということにはならないだろう。他にふさわしい方がいらつしやるはずだ」

「よかつた…！！　そうですね！　おかしいですね！　義兄上…！！」

国王本人に続き、実姉にまで非現実的な話をされたところへ、やつと常識的なことを言ってくれる味方が現れた！と手を握らんばかりに迫るソナチネ。

「しかし、陛下は本気だ。それは掛け値なしに真実だ。このままいけば近いうちにお前は女王の後ろ盾としてふさわしいと陛下が考える相手と強制的に結婚させられるだろうな。陛下が異世界へ行こうが行くまいが。女王になろうがなるまいが。うん」

さすがは魔王様、一旦喜ばせておいて再びどん底につきおとしてみせた。

女王として即位、という最悪のシナリオは避けられる可能性が見えてきたが、避けられない災厄もあるらしい。たまらずソナチネは上司の前であるにもかかわらず傷だらけの机に両手を突き、俯いてしまった。上司の方もそんな義妹を気の毒そうに見やるのだった。

「それで…だ。」

まだ続きがあったのか、義兄は何故だがこれまで以上に重苦しく切り出した。

「…最初にきいた件だが」

「…なんでしたっけ？」

すでにそんな前のことは頭がないソナチネは素で聞き返す。

「うつつ、忘れたか。まあそうだな、仕方ない」

「なんででしょうか？」

よほど話しづらい内容なのか中々用件 彼は本来、この話のため気は進まないながらもソナチネをここへ呼んだのだが 言い出せず、チラリと気まずそうに彼女に目をやる。

「私的な話をする場でもない…いやこれまでの話も私的といえば私的か。それに私がきくのもなあ…ソプラノがきいてくれるのが一番いいんだが」

「あの、今までのお話で十分衝撃的でしたので、日を改めてでも私はいいいですが」

あまりにも言いにくそうにしているので、もうこれ以上はご免とばかりに思わず先送りを提案するソナチネ。

「ああ…そうしたいが…これも義兄の務めだろうと後でソプラノに

詰め寄られるかもしれん……。」

まだ新婚だというのに、何故だか娘を前にした父親のような気まずい心境で義兄はきいた。

「……では尋ねるが、今、お前にはいないのか。その、慕う相手というか、特定のなんだ、恋人とでもいうのか」

「……………いません」

意外に初心な義兄が何を言いたいのか理解できた後、長いこと黙り込んだ末にソナチネは正直に答えた。繊細な問題を尋ねられた心が痛い。

この、団長室での相談でどちらの方が打撃を被ったのだろう。義妹という微妙な立場の相手に気まずい質問をした初心な義兄も相当消耗していそうだ。

どうやらフィーネの「ソナチネに春が!？」という予感はあるが間違いではないのかもしれない。これからの話だが。

義兄の憂鬱（後書き）

すみません、30分かそこらの話ですが、7話が抜けてました。直したあとではわけわからないでしょうが。

招待主の思惑

8・招待主の思惑

第一騎士団長の執務室を（いろいろな打撃を受けて）辞したソナチネは、宿舎に戻って鍛錬でかいた汗をふき取り着替えてからついでに昼食をとった後、そうこうしている間にも国王陛下からの呼び出しの時間が迫ってきたので、重い気持ちで今度は国王の執務室へ向かった。

彫刻をほどこされた国王の執務室の重厚な木製の扉の前では、きちんと話を通っているのかその前に立っている近衛の同僚に止められることもなくすぐに室内へと通された。

「お召しにより、騎士ソナチネ・コン・フォーコ参上いたしました」
控えの間より入室してすぐ、奥の机 さすがに傷はついてはいないが、義兄といい勝負で書類が積んである に主君の姿を見とめ、膝をついて臣下の礼をとり頭を下げたまま名乗る。あちらから声をかけられるまではこのままの姿だ。またどんな爆弾を投げつけられるのかと、暑くもないのに背中を汗が伝う。

「ああ、待っていた。早速だが、舞踏会の件で打ち合わせだから、立ちなさい」

不眠が続いているにもかかわらず今日も麗しい国王陛下は、戦々恐々としているソナチネにひとかけらの猶予も与える気はないらしい。

「私はこの後、謁見が入っているのですすぐに席をはずさねばならな

い。あとはこのマルカート伯が説明するからよくきいておいてくれ」
そう言った陛下の横には、大臣の一人であるマルカート伯爵が立っていた。室内の人間の人数や位置を一瞬で把握する騎士の習性でもって見分けていたので、頭を下げた状態でも彼がいるのはわかっていた。この三ヶ月を近衛として過ごしていたソナチネは伯爵の顔も見知っていたので、彼が書簡に書かれていた舞踏会の招待主であることも同時に思い出した。

「陛下、私はまだ陛下のお話を了承したわけでは…」

立ち上がって顔を上げると、なんとか思い直してもらえないか（はかないながらも）訴えるつもりで来たソナチネは、このまま流されてはたまらなるとばかりに必死に声をあげる。

だが敵もさるもの、その途端にさえぎられる。長い睫毛を臥せ、美の神に愛されたその顔を痛ましげに歪める。

「ああ。私の都合で突然婿をあてがわれるそなたには可哀そうなことをするが、一人で女王になるほうが苦勞が大きいだろう？ できるだけそなたの意向を大事にするから」

いやいや、陛下にそんな苦しげにされてももつごまかされませんよ、とソナチネも負けない

「なにゆえそんな非現実的なことをおっしゃるようになってしまったのですか！？陛下

はこの国の国王でいらっしゃるのですよ！？閣下もおかしいとは思われないのですか！！」

どうしてここにいいのか薄々察しながらも、伯爵にも思わず同意を
求める。

突然矛先を向けられた40代後半の伯爵は年長者の余裕でもってニ
ツコリ微笑んだ。ごましお頭に顎鬚を生やした彼は中年の域にある
にもかかわらず腹がでることもなく髪がさびしくなることもなく、
中々のナイスミドルである。

「思いませんとも。ソナチネ様」

様。様がついた。「ソナチネ嬢」ならまだしも、様。

「…そういうことですか。ここには味方はいないんですね…。」

「いえいえ、ソナチネ様が無事にご即位なされたら、誠心誠意お仕
えする覚悟ですよ」

口調は極優しいが何のなぐさめにもならなかった。

「アレグロ陛下が書簡にて書かれた通りですが、私からも説明いた
しましょう」

穏やかそうな物腰ながらも、ソナチネの混乱を全く無視して話を進
めるマルカート伯。

「ここまではおわかりいただけましたか？」と、いちいち返事を求
められながらソナチネが理解させられたことによると、明日伯爵邸
に招かれているのはいずれも有能な青年達で彼女が誰の手をとった
としても女王の良き伴侶となり支えてくれるであろう人物が揃うこ
と、彼女の支度は伯爵夫人が全て整えており舞踏会用のドレスが仮

縫いまでできているので今日の午後には細かい採寸さえすれば完成すること、明日の彼女の勤務は朝から夕方までになつていて人員の手配は済んだので午後は休みになつていて終わり次第伯爵邸で準備を始めてほしいこと、の以上だった。

（こわっ！こわっ！ええっ、いつ間にそんなに有能な人たちを集めたの！？全然知らないんですけど！噂とか聞こえてきてないんですけど！）

（仮縫いは済んでるってどういうこと！？そこに至るまでに私の採寸とかつていらなんだっけ！？身長とか自慢じゃないけどそこらのご婦人よりずっと高いですよ私！？）

（仕事が終わつたらすぐつて！！逃がさない気だ！！ノノちゃん助けて！！魔王様でもいいから！！）

伯爵は姉や義兄にまで助けを求めるソナチネの心の葛藤を完全にスルーし、説明を終えるとぼんやりした彼女の手をとり国王の執務室から連れ出した。国王本人はいつのまにか謁見の間に向かつてしまつたらしい。

「さ、では早速ドレスの採寸のため我が屋敷においでいただきましょう」

こんな時でなく、相手がソナチネでもなければ、乙女が思わずキヨンとすること間違いなしの完璧で優雅なエスコートだった。とてもまずいことだが、流されかかっている。

* * *

馬車に乗せられ到着したマルカート伯爵邸では伯爵夫人本人に出迎えられ、すぐに採寸のために用意された客間に通された。そこには

すでに服飾を専門とした侍女たちが巻尺を手に待機しており問答無用で着ている近衛の制服を脱がしにかかる。夫人は傍でその様子を暖かく見守った。

「いえあの、自分でできますからっ！それに私、汗くさいですよ！」

「大丈夫ですよ。お嬢様はお楽になさっててください」

「そうですよ。立ってて下さるだけでいいですから」

ふふふと笑いながらも有無を言わさぬ手つきでソナチネの抵抗をふさぐ侍女たち。普段は荒くれ男ばかりを相手にしているソナチネは彼女たちの柔らかい手を乱暴に振り払うなどできるはずもなく結局大人しく下着姿を晒し採寸を済ませることとなった。実際の話、自分局のドレスを作ってもらうのは初めてなのでどうしたらいいのかわからないのだが。ただ、午前中の鍛錬のせいで汗臭い自分がいたたまれない。

「…これが私のドレスですか」

最初の採寸が終わったあと、仮縫いのできているドレスを直し、その後もう一度直したドレスを身にまとうて最後の微調整をする、という話だった。今は最後の微調整のためにソナチネはほとんど生まれて初めて、ドレス - 貴婦人用の夜会服 - に腕を通した。

落ち着いた緋色を基調としたドレスで、首元が大きく開いており袖もないのでソナチネは非常に落ち着かない。腰には当然のようにコルセットが装着させられたので慣れない彼女にはこれもまたつらいことである。スカート部分には膝のあたりから裾へかけて斜めに切り替えががついている。客観的に見ると、落ち着いた色合いも比較的にすっきりとした全体のシルエットも、本人不在のまま作られたにしては良くできていて彼女に良く似合っていた。

「よくお似合いですよ」

「本当に！！日に焼けておいでですけど、この色はよくお肌になじんでますわあ」

「お嬢様はお背が高くっていらっしやいますから、こつという形が映えますのよ」

侍女たちはいろいろ褒めてくれるが、慣れないことに疲労困憊していたソナチネの心境としては「もうどうにでもして…」という投げやりなものだった。

引き続き、首飾りなどの宝飾品を合わせたりソナチネの短い髪を結うためつけ毛をつけて髪飾りを刺してみたり、と明日のために全身の装飾品の打ち合わせが行われた。本人そっこのけで、采配はほとんど伯爵夫人によって行われた。

全て終了して、最後にマルカート伯夫妻と応接間でお茶をいただく頃には、午前中は思い切り体を動かしていたこともあり完全にくたくただった。

「まあ…大分お疲れのようですね」

「お疲れのところ申し訳ありませんが、もうしばらくお付き合い願えますか？」

伯爵夫妻の言葉にも力なく微笑むことしかできなかった。

「大丈夫です…。あの、まだ打ち合わせることがあるんでしょうか？」

そこで伯爵はひとつ息を吐いて準備をすると、真剣な顔で話始めた。

「はい……。この話でソナチネ様は非常に驚かれ、困惑されているでしょうと思ひましてね……」

やっとまともな話ができるのか、とソナチネも疲れて椅子の背にもたれていた姿勢を正し身構える。

「あ、先に申し上げておきますが、私はアレグロ陛下の協力者ですよ。期待するのはおやめください」

(……そうですか。そうですね。思い切り協力してますよね)

ソナチネの疲労度は一気に上がった。わかりやすく肩が思い切り下がる。

「何かからお話していいのやら……。実はこの件を陛下が私に打ち明けられたのは一月ほど前

です。驚きました……。ソナチネ様もご存知のとおり陛下は王妃となられるはずだったコトネ様を失われ、非常に気落ちなされていましたがまさか譲位までお考えだとは想像もしていませんでしたからね」

「私は現在法務大臣を拝命しておりますので、ソナチネ様のご即位に関して法律的な障害についてお尋ねだったので。必要なら法改正のために議会を開かれるということで。いや陛下は全く真剣でしたな」

「もちろん私は反対しましたよ！！アレグロ陛下はまだお若くていらつしやるし、この先人生は長いですからね、出会いもあることでしょうと」

「しかし……陛下は全くお聞き入れになりませんでね。ご自分がコトネ様のところへ行かれるのもう決まったことで、その後の王国を

どうするかが問題なのだ」と

「何度も何度も私の執務室においてになって真剣にお話になりました。その懸命なお姿に不覚ながらも自分の若い頃のことを思い出されました…」

そこで傍らに座る奥方と愛情にあふれた視線を交わす伯爵。伯爵夫妻の大恋愛と結婚後の仲むつまじさは有名だ。

(えっまた!? またノロケ!?)

恋人ナシの21歳独身、限界のはずの疲労度値が更新された!!

「えー、どこまで話しましたっけ。ああそうそう、大事な話が残ってます。そういう

ことで、私はアレグロ陛下に協力することになったんですが」

「ソナチネ様の王位継承権ですが、現在は第六位でいらっしやいます。これはご存知ですね?」

もちろんソナチネはご存知ではないが、伯爵の話は続く。

「ですが、ソナチネ様に先んじられて継承権をお持ちの方々はどうも少々難ありでいらっしやいましたね、まず先々代の国王陛下の弟君のご息がお二人、現在のコン・ブリオ公爵家ご当主のモデラート様が第一位ですがご高齢の上に持病をお持ちです、恐らくご辞退なさるでしょう。モデラート様の弟君のリテヌート様は神殿で終生誓願を立てておられますのでこちらと同じでしょう。そしてモデラート様にはお子様がお二人いらっしやいますそれぞれ第三位と第四位です。モデラート様はご結婚が遅かったので、お二人ともお年はソナチネ様よりも少し上ぐらいです。このお二人についてはソナチネ様の方がよくご存知かと思いますが、まあ、その、問題ありますよね」

「その次が、ソナチネ様の甥御のコン・フォーコ公爵ラルゲット様で第五位をお持ちです。が、公爵位ならともかく御年7歳では王位

を継がれるのは無理でしょう。また後見に立たれる母君にも、それではご負担がかかり過ぎになりましょう」

「そして、アレグロ陛下は王位の継承を深くお考えの上、第六位でいらっしやるソナチネ様が相応しいとお決めになりました。…お分かりいただけましたか？」

「はあ、あの、思っていたより私の継承順位が上なのは理解できましたが…。そういえば姉はどうなるんでしょう？ そのお話でいくと私より上では？ 身びいきなんでしょうが、姉は私などよりもよほど女王に相応しいのではと思うのですが…」

「あれ、ご存知ではないのですか？ 姉君ソプラノ様はアレグロ陛下下とのご婚約解消時に王位継承権も放棄なされてますよ」

今頃気付いたのか、と言わんばかりに目を見張る伯爵。言われるまでもなくその通りである。

（そうか…！何で昨日気が付かなかったの私！！どうして姉上も言ってくれなかったのかしら…。自分で考えろってこと？そんな薄情な…。）

「そういうわけですから、王位につかれるのはソナチネ様となっております」

「微力ではありますが、ソナチネ様がご即位なされるまでもその後も私と我が伯爵家は全力でご助力申し上げます。まずはお約束します。まずは明日の舞踏会ですね。ソナチネ様が納得の出来る方をお選びいただけるよう力をつくしますのでおまかせ下さい」

そう締めくくって、ナイスミドルな伯爵はニッコリ笑った。

「そうですね。明日はソナチネ様を最高の美女にお仕立てしますから、きつとどなたをお選びになっても、お相手の方はソナチネ様に参ってしまわれますわよ」

もちろん、ソナチネ様の元々のご容姿が整っておられるからですけど、と伯爵夫人は口添えした。

結局この日も流されるままに、着々を外堀が埋められていく様をなす術もなく呆然と見ているだけのソナチネだった。姉がその不甲斐なさを見たら、王位継承への協力は考え直してくれるのかもしれない。やっぱりこの娘には任せていられない、と。

招待主の思惑（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

侍女の懇願

8・侍女の懇願

翌日、どうしてこんな災難が降りかかってきたのかと一晩中深く悩んだソナチネは、寝不足の頭で近衛の勤務についた。よく晴れた日で、恨めしくなるほど爽やかな朝だった。

昨日言われていたとおり、朝行つた近衛の詰め所では今日の勤務が正午までに変更された旨を告げられた。

「どうしたんだ？ 顔色が悪いぞ？」

二人一組で国王の私室から執務室まで国王陛下下の護衛をし、執務室に着いた後は扉の前でも番をする同僚・ヴァルスが心配そうに声をかけてきた。本来なら勤務中であるから私語は厳禁なのだが、体調が悪いのでは護衛など勤まらないだろうと彼は考えたのだ。

「大丈夫です。少し寝不足なだけです。…申し訳ありません」

寝不足の元凶を護衛しながらなので少々理不尽な気もするが、仕事は仕事、国王の護衛という名誉ある職務はおろそかに扱ってはいけないとまっすぐ前を見たまま背筋をピンと伸ばし、ソナチネは答えた。体調不良で任務に支障をきたすなど以ての外なのだ。

「そうか？ 無理するなよ」

近衛の中でも比較的友好に接してくれている気のいいヴァルスは、自分も姿勢を正しこの異色の後輩を思いやった。彼女は公爵家の令嬢であるにもかかわらず、騎士をしている変わり者だ。それが騎士

団よりも女性の少ない近衛隊に移ってくるときいた時は、どんな厄介ごとが起こるのやらと彼は憂慮したものだが、実際に彼女が来てもどうということもなく（国王陛下の奇行を除いては）平和に任務をこなしていくので安堵していたのだ。人は身分や性別では計れないものだな、と大分彼女を見直していたので彼は普通に心配していただけた。ただだった。

正午となり、休憩のために国王の護衛を交代の者に代わるとそこでソナチネの今日の勤務は終わりだった。が、一度詰め所に戻り報告書に記入をしなければならぬだろう。ヴァルスとともに詰め所へ向かおうとしたソナチネを、呼び止める者があった。

「失礼いたします。ソナチネ様、お久しぶりでございます」

淑やかにお辞儀をしてソナチネの名を呼ぶ侍女の制服の若い娘。それは三ヶ月前まで王妃となるコトネへと共に仕えていた侍女・ヘオンだった。

「ヘオン……！お久しぶりです。」

驚きながらもヘオンの元に歩み寄るソナチネに、侍女は微笑んだ。が、すぐに顔を暗くしてしまう。

「お仕事の途中に申し訳ございません。ですが、どうしてもソナチネ様にお話ししたいことがあります。昼食の後で結構ですから少しだけでもお時間をいただけませんか」

「ああ、はい。ですが今日はちょっと……」

昼食後の予定は詰まっているのだ。すぐにも伯爵家から迎えが来てしまうかもしれない。

すると、ヘオンの様子を見かねたのかヴァルスが助け船を出した。

「コン・フォーコ。報告書は私が書いておこう。こちらはいいから今すぐ行ってあげるといい」

「しかし…。」

「午後から陛下のご用で抜けるのだろうか？今行っておかないと次がいつになるのかわからないぞ」

重ねてすすめられ、ソナチネはヴァルスの言葉に甘えることにした。迎えは昼食後なのだから今からヘオンの話をきけば間に合うだろう。

「ありがとうございます…。申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。」

そうしてソナチネはヘオンの話をきくこととなった。ヘオンがそれでいいというので、彼女が王宮で働く侍女としてその中に与えられた部屋で昼食をとりながら。

* * *

「ソナチネ様はお変わりありませんわね…」

ヘオンの部屋で彼女とともに小さなテーブルにつき、下働きの者が運んできた食事をとっているソナチネはその言葉に内心首を傾げた。それに話し方も変だ。以前はもっと気安かったし、敬称なんてつけていなかった。

(三ヶ月ではそう変わらないような…)
若干、嫌な予感がしながらも話を促した。

「そうですね。それで、急かすようで申し訳ないのですが、お話とは」

「そうですね、失礼いたしました」

恥じらうようにわずかに顔を赤くしているへオンは可憐であった。彼女は王宮に仕える侍女ではあるが、ソナチネほどの名門ではないにしても、もともとは貴族の令嬢である。少し赤みがかった金髪に人懐こそうな茶色の瞳を持つ美しい娘だ。だが、その顔をよく見てみると今は心なしか憔悴しているように感じられる。

「ソナチネ様はもうお聞きになりましたわよね？その…陛下のお話を」

「はい…。ではへオンも？」

「私もです。実は陛下の様子がおかしいので、僭越とは思いましたが、直接お尋ねしたんですの」
たおやかな外見とは違い、なかなか行動力がある。

「すでにご存知なら話は早いですわ。単刀直入に申し上げます。是非女王におなり遊ばして下さいませ…ご無礼をお許してください」

あなたもですか…！！

思わぬ方向からのアプローチに、完全なる死角から突きを繰り出さ

れてきた時の衝撃を味わうソナチネ。

「私ごときが口出しして良い話ではないことは重々承知しております。ですが、どうしてもソナチネ様に直接お会いしてお願いしたかったのです」

「あの、疑問なのですがヘオンは私のことをよくわかってるでしょう!? それなのに女王にと言っているのですか?」

これまで幾度となく浮かんできた疑問なのだが、陛下の阿呆な思いつきださて置いて、何ゆえ自分を女王になどという突拍子もない話が飛び出てくるか心底それが不思議でならない。

「どこからどう考えても私は王になどなれる器ではありません。それはヘオンもよく知ってるではありませんか…」

コトネが神子としてこの世界にやって来た時から彼女付きの侍女だったヘオンと、コトネの従軍時に護衛として付き従ったソナチネは2年以上の付き合いだ。同性で同じ人物に仕える間柄、もう一人のコトネの侍女・トオンを入れた三人は仲が良く、言葉を交わす機会も多かった。そんな時なぜか年上のはずの（一歳だけだが）ソナチネがなんとなく妹的な役回りを振られていた。女性らしいことにはとんと疎い彼女をいじって遊んでいたのは目の前の美しい女性だ。そんな風に他人に遊ばれるような人物を女王に本気で推すつもりなのか。

「…ソナチネ様は素直でまっすぐな方です。今は不足でもそんなあなたを助けようと手を差し延べる人は多いでしょう。畏れながらそれはアレグロ陛下にもないものですわ」

ソナチネは目を見開く。これは今まででは一番真つ当な説得だった。血筋や状況ではなく、初めて自分自身に対する評価を与えられた。

(…そんな風に考えることもできるのか…)

「お気持ちはわかりますわ。突然のことにさぞかし戸惑っておいででしょう？ご迷惑かもわかりませんが、私がソナチネ様に一度直接お願いしたかったですの。どうか…あまり悪い面ばかり見ずに、前向きに考えてみてくださいませ」

そこからへオンは話題を変え、コトネの思い出話やトオンが最近起こした騒動の話など明るく軽い話を振り、二人の昼食を終えたのだった。だが、へオンのどことなく憂いた顔が晴れることはなかった。

ソナチネがへオンの部屋を辞した後。

「…はあ」

自分の言いたいことを伝えられた、へオンはほっとため息をつく。その顔色は変わらず暗く、ギリギリのところまで平静を保っていたため精神的な疲労も加わっている。

王宮に仕える侍女。この言葉が城下や地方に住む王宮外の者たちにとれほど羨望のまなざしで見られるか、へオンは良く知っていた。へオンは貴族だが、実家での暮らしはほぼ平民を変わらないものだった。貴族といっても名ばかり、先祖の放蕩のおかげでわずかなつてしまった領地からあがる収入は少なく、そのほとんどは時折気まぐれのように招かれる夜会に出席する母の体面のために使われ、生活は本当に苦しかった。

へオンの王宮勤めはよくある行儀見習いのためなどではなく、それが一家三人が食いつなく唯一の方法だからだ。幸い見目よく聡明な彼女は王宮に職を得、その上王妃付きの侍女というこの上ない地位まで出世することができた。王妃のいない現在、中ぶらりんな彼女は先王妃、つまりは国王アレグロの母に仕える侍女の末席を与えられているが、このままいけば、女王となったソナチネに仕えることになるだろう。だが、へオンの目的はそれではない。

「へオンいるの？さっきソナチネを見た気がするんだけど…」

昼食の食器を下げさせた後、そのままテーブルについたままだったへオンの部屋にまた新たな訪問者が来た。

「トオン？いつも言ってるでしょう。ノックくらいしなさい」

入って来たのは、同僚・トオンである。金髪に茶色い目、姉妹でもなければ親戚でもないのにへオンとどことなく似た娘である。外見上はへオンに似ているが、性格は全く違う。同い年なのに聡明なへオンと比べるとそそっかしく、これでよく王妃付きに選ばれた…と彼女にため息をつかせるほど落ち着きのない娘なのだ。

「そうじゃあなくってえ。今ソナチネと会ってなかったっ？ 元氣だった？」

この娘は少し変わっている…女騎士のソナチネに憧れを抱いているらしく、ソナチネがいると明らかに浮ついて、構ってしようがない。

「…もう仕事に戻ったわ。私たちも行かないと」

「へオン。ソナチネに何を言ったの？」

わずかに息を呑む。そうだった、トオンはこんなでも意外と鋭いところがあるし情報通だ。見られたのは失敗だった。

「…別に」

言葉少なく答えるへオンに、トオンは一気に核心をつく。

「そういうのは、やめた方がいいと思うよ。気持ちはわかるけど…へオンがづらい思いをするだけじゃない…」

思わぬ労りの言葉に、淑やかな侍女の仮面が外れたのだ…普通の恋する娘としての己が出てしまいそうになるが、必死で涙をこらえるへオン。

「わ、私がそうしたいんだからいいでしょう。何か陛下のためにできることがあるならやってもいいじゃない。後悔したくないの」

へオンが片思いを続ける相手…国王アレグロは消えた王妃・コトネを決して諦めることはないだろう。だから彼女は彼のためにできること、彼が思い残すことなくコトネの元へ行けるよう、微力とわかっていても協力しようと思っている。身分的に自分にはお呼びのないことなのはわかってはいるし、彼が国のために愛のない結婚をするのは自分が報われないこと以上に嫌なのだ。もとより叶うことのない想いであることは承知だ。へオンが初めてアレグロに会ったとき、彼にはすでに婚約者がいたし、コトネのことがあつてからは他が眼中にないことは傍で見ているほどに理解できた。

「わかっているけど。ままならないんだなあ…」

トオンは思う。もちろん仕えていたコトネのことは好きだった。率直な人柄が面白いし、あの一度ハマると止まらない滔々としたしゃべりは、自身もおしゃべりのトオンをして感じ入らせるほど、流暢でなめらかだった。ときどき故郷の話になると、知らない単語がたくさん出てきて理解できなかったが。

コトネのことは気に入っていた、それでも、と思わずにはいられない。

（あんな変人を本気で想う奇特な女の子がここにいるっていうのになあ…）

コトネしかだめなのだろうか。さすが変人。

泣くことができず、うな垂れるへオンを見てトオンはそつと部屋を出た。これで十分つついた、一人にすればきつとへオンは泣くだろう。そうやって少しづつ忘れていくしかないのだ。彼女はもう、自分で手放すことを選んだのだから。

侍女の懇願（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の状況判断 そのいち

10・文官の状況判断 そのいち

へオンとの昼食を経て、一連の出来事ですっかりぐっちょぐっちょになつていたソナチネの心中は少しばかり落ち着いた。これまで完全に周りに吞まれ、なんとかして回避できないかと悩むばかりの彼女だったが、少し距離を置いてこの状況を見つめることが必要ではないだろうか？

(正直、姉上やマルカート伯は何を考えているのか私にはサツパリわからないし…信用できないってほどでもないけど。結婚云々や反逆罪も恐ろしいけどこのままじゃいけない…)

このままいくと本当に女王にされてしまう。生憎と2・3日の説得で曲げてしまうようなやわな騎士魂をソナチネは持ち合わせていない。

この後の予定のために王宮の回廊を近衛の詰め所へと歩きながら、考え込むソナチネの目にある扉へと入っていく人物が飛び込んだ。もちろんソナチネには予定があるし、約束の時間も迫りつつある。誰かに相談など持ちかけている場合ではない。

その扉をじっと見つめるソナチネ。すると彼女にしては珍しい意地の悪い笑みを浮かべる。

(ここで、思い通りにいかないことを示しておくのも悪くはないかも?)

さすがに国王陛下肝いりの舞踏会をすっぱかす勇氣はないが。悪戯をする子供のような心地に戻ったソナチネはやや自棄になつている自分に目を瞑り、まわりに誰もいないことを確認した後、その扉をノックした。

* * *

「はつきり言わせてもらう。出て行け」

一人で室内にいた人物は、入室の許可を出す返答に扉を開けて足を踏み入れたソナチネが挨拶する間もなく、彼女の顔を見分けると直ちに退室を求めた。

「…久しぶりなのにそれはないんじゃないの？あれ、5年？6年？けっこう経つわね」

開口一番に拒絶の言葉を吐かれ、少しムツとしたソナチネだが彼の毒舌には慣れたものだった彼女は軽く流した。

彼 レジェロ・スケルツァンド、今は王宮に仕える文官である。はソナチネの幼馴染の一人であり、かつて一緒に国王アレグロの遊び相手として王宮に上がっていた頃からの付き合いだ。成長したアレグロが遊び相手を必要としなくなり、同時にソナチネも騎士団に入るため馬術や剣術を習い始め多忙となったのでそれからほとんど会う機会などなかったが。

確か最後に顔を見たのは

「6年前かな、陛下の即位式の祭典で会ったような、会ってないよ
うな」

「相変わらず可哀そうな頭だな。耳まで悪くなっていたのか？さっさと出て行け」

「だからさ、それはないんじゃないの？会ってもないのに私が何かした？」

「ふん、じゃあ言い方を変える。俺は忙しいんだ。お前に用もないし」

すげなく追い返そうとする彼にはかまわず、ソナチネは室内に無造作に置かれた椅子に腰掛けた。彼の態度がツンケンとしているのは子供の頃からで、当時からそれを無視しはずけずけと入り込むことが彼女にとっては当たり前のことだった。

「へえ、ここって文官の部屋でしょう？今は何してるんだっけ？」

「…本当に相変わらずだな。もうちょっと相手の都合を考慮よ…」
思い切り苦虫を噛み潰した顔をしたレジェロは深いため息をついた。久しぶりに会うというのに以前の力関係が少しも変わっていないことに深い慨嘆をおぼえる。

レジェロの外見はあまりパツとしない。くすんだ灰茶色の髪と茶色い瞳、顔立ちも地味だし、風景に溶け込んでしまいそうなほど人目にとまらない。昔から室内派で体を動かすことが得手ではないので体格も良くはなく、その上猫背だ。彼の王宮内の仕事部屋も、部屋の主に合わせてか一応は整理整頓されてはいるが机の上は書類で埋め尽くされる程度の荒れ具合、家具調度も王宮から支給された品で、ごくごく普通の仕事部屋だ。

だがレジェロの服装は少し変わっている。派手で珍妙な格好という

意味ではない。官吏に支給される制服ではないのだ。黒いフード付きローブのそれは普通は魔術師が纏う物だ。

「きいていい？」

「駄目だ」

ソナチネの視線の先から、その内容を察し即答する。

「いつから魔術師になったの？確か弟子入りしようとしたら断られたって…」

「駄目だって言ってるだろうが！？ お前はそんなことを質問しに来たのか？ 今さら」

「でも魔術師のローブでしょう？資格のない人間は着ちゃいけないんじゃない？」

この国では魔術師は貴重だ。彼らはほとんどが国に仕える王宮魔術師で、その継承は師弟制によってなされる。だから魔術師になりたいた人間は皆王宮魔術師に弟子入りを志願するのだが、大抵は断られる。何故なら魔術師になるには素質がなくては不可能だからだ。魔力という絶対的な素質が。そして魔術師になれるほどの魔力を持つ人間はめったにいない。

魔術師たちは国から最低一人以上は弟子をとることが義務付けられているが、それほどの魔力を持つ人間がめったにいないため彼らは自分で魔力の強い人間を見つけ出し半ば強制的に弟子にするのが彼らの慣習となりつつある。

そのため自分から弟子入りを志願する魔力のない一般市民は誰でもすげなく追い返されるのだが魔術の有用性や待遇の良さに憧れ結局志願する者は後を絶たない、というのが現状なのだ。

「…これはっ、魔術師長が直々に着用の許可をくれたんだ。俺は確かに魔術師じゃあないが、魔術理論は勉強したから。色々と研究して、それが役にたったからその褒美で」

魔術師は子供の頃からのレジエロの夢だった。だから王宮魔術師全員のところへ弟子入りを志願しに行ったがその全員に断られた。全て同じ、「魔力が（からきし）ない」と。

当時は絶望した。幼いレジエロは今と変わらずあまりパツとしない子供だった。それぞれに優秀だったり、家柄が良かったり、見目麗しかったりと特出していた王子の遊び友達の中で彼は完全に埋没し、また周りも彼を軽んじていた。彼の抛り所は大人になったら魔術師になって国に仕える夢を叶えることだけだった。

夢を絶たれたすぐには立ち直れなかったが、レジエロはこれでなかなか執念深かった。文官として王宮に仕えながら独学で魔術理論を学んだのだ。努力を惜しまぬ上に頭だけは良かった彼は、普通なら魔力のない人間に理解できるはずのない魔術理論を修めることに成功し、拳句の果てにはそれを進化させたのだ。

その努力は周囲からも認められた。全く素質のないところから自分では使えない魔術を進化させてみせたレジエロに、魔術師長から魔術師にしか纏うことの許されないローブを贈られたのである。彼のためだけに作られた、特別製である。

レジエロがそこまで詳しく説明することはなかったのだが、それだけでも十分だった。

「えーっ！！すごいっ！どうしたらそんなことができるの！？レジエロは子供の頃から頭が良かったけど、そんなことまでできるんだ…すごいなあ」

レジェロにとっては予想外の反応だった。すっかり感服したソナチネはニコニコと笑いながら素直な賛美を送っている。その、真つ直ぐな感情を向ける彼女を前に一瞬呆けてしまう。

(…そついやこういうやつだったか。才能もないくせに諦めの悪い人間とか言われたからなあ…)

疑心暗鬼になっていた。魔術師長に認められたとき、それはそれはやっかまれたので。

子供の頃もソナチネだけは斜に構えることのない、素直な態度で接してきていた。王子の遊び相手として集められた子供たちの中で、二つ年下の女の子という彼女も浮いていた。最初の頃は、同じく周囲から弾かれつつあったレジェロによく纏わり付いてきたものだった。その後、ソナチネが男の子以上に活発だとわかると王子が自ら輪の中に引き入れ、同時に二人の交流もほぼ終わった。

それはそれとして。

「…結局、なんか用があるのか？」

「ん？ ああっ！！ そうだった。相談したいことが一つ」

「！！！！？ 頼むっ、それだけは止めてくれ！！ 俺には責任は取れん！！」

「まだ何も…。その言い方はやっぱり何か知ってるんだ…」

「知らん。俺は何も知らん。お前もここには来ていない。そついうことにして頼むから今すぐ出てってくれ」

今度こそ実力行使で部屋から追い出そうと、ソナチネの腕を取ろうとするレジェロだが、そう簡単に素人に手をかけられるほど彼女も甘くはない。相手の動きを見て、椅子から立ち上がり身をかわした彼女は素早く彼の後ろに回りこむ。

「やっぱりわかってるじゃない！ねえ、レジェロは頭がいいのが自慢でしょう。私の相談に乗ってほしいの。どうすれば私は逃げられる？というか陛下の異世界行きは止められないの？魔術師長と知り合いならわからない？」

一気に言ってしまう。これで聞かなかったことにはできないだろう。往生際悪くも耳をふさぐレジェロだが、ソナチネは彼の耳元でわめいたのだ。

「お前は疫病神だ……」

「そこまで言う！？ 待ってよ、そんな深刻なの？ 私、生き延びられる？」

がつくりと両肩を落とす、しゃがみ込むレジェロに詰め寄るソナチネだが、思いもかけない言葉を返される。

「いや……そりゃ死にやしないだろう。なんだそんな心配をしていたのか？」

呆れ顔で言われ、肩透かしをくらうソナチネ。

「相談か……。言っておくがお前の相談に乗るのは今の俺にとっては非常に都合が悪い。だがそんなことで悩まれていても時間の無駄だな。特にお前の頭じゃ。しょうがない、きいてやるから一応話して

みる」

失礼な言葉を挟まれムっとするソナチネだが、せつかくその気になつてくれたのだから、と話し出す。

「……で、今は逃亡中、と」

一昨日からの一連の出来事を順を追って話した。自分で消化しきれないので、あったことをありのままに言うだけだ。レジェロはというと、頭を抱えてうめいていた。

「〜それで、なんで俺の部屋に入ってくるんだ…。理解できん。何故だ、嫌がらせか！？そんなに俺を恨んでるのか！？」

「は？ 恨む？」

相談しているのに、いきなり心当たりのない話が出てきて、目を瞬かせる。子供の頃の話だろうか、ソナチネの方にはレジェロ恨むような思い出はない。むしろ姉のように頭のいい彼には憧憬を抱いていた。

「…もしかしてお前はきかなかったのか？」

「何を？」

「う、えーっとだな。うん、知らないならいいか。忘れてくれ」

再び予想外の反応をされて少し悩むレジェロだが、知らないのなら自分から蒸し返すこともないかと思ひ、なかつたことにした。その過去の件で、ソナチネに対して弱味のあつた彼は、自分の仕事は置

いて、ひとまず真面目に彼女の相談に答えることにした。

そこでようやく、二人とも椅子に座る。

「まず、陛下の異世界行きだが。確かに騎士団長が人を送り込んで調べてるな。魔術師長も探られていることに気づいている。だが…」
難しい顔で手をあごにやる。考え込むときの彼のクセだ。

「お前には気の毒だが、陛下を止めるのは無理だろう。この異世界行きの魔術を作ったのは陛下ご本人で、魔術を行使するのも陛下だ。つまり陛下がその意思を変えない限り、まわりから阻止することはできないな」

「陛下は魔術が使えるの！？ 初めて聞くわ」

「ああ。元々魔力お持ちで、そのお立場から、師について修行をするということはなかったそうだが…コトネ様のためにこの3ヶ月で魔術を修めたそうだ」

ソナチネは、どこまで執着心が強いのだろうと背筋を凍らせる。魔力を持つとはいえ、魔術の修行とは普通は何年もかかるのではないのだろうか。

「それなら、コトネ様を連れて戻ってくればいいじゃない!!」

「いや、おそらくだが、あちらに一度渡ってしまえば戻っては来られないという話だ」

「じゃ、行けるかどうかまだ試してないってこと?」

「そうだな、理論は完成しているだろうが…術者である陛下本人がその場で調整する んだろう」

「そんな無茶なことを…するつもりなんだ」

なんとという執念。やはり国王は普通ではない。

「とにかく、アレグロ陛下を国に引き止めるのは不可能だ。それはいいな？」

「よくはないんだけど。」

「だろうな。あとは王位の継承権か？ そうだな…それに関しては言い換えればコン・フォーコ家とコン・ブリオ家の争いつてことになるな」

「コン・ブリオ家の当主は確かに老齢だし、病気も重い。その弟もマルカート伯の言った通りだ。この二人は除外していい」

「そんなに簡単に考えていいの？本人がお年寄りでも自分の子孫に王位を継がせられるなら、国王になろうと考えたりしない？」

昨日からの疑問を差し挟む。

「いや、どうだろうな。コン・ブリオ家の兄妹についてはお前の方が詳しいだろう？あの二人が国王についてというのは、親でもためらうぞ」

「そ、そうかな」

顔を引きつらせたソナチネはコン・ブリオ家の二人のうち、妹のフエルマータのことを思い出す。思い浮かんだのは最後に見た彼女の凄まじいとしか言いようのない姿だ。

あれは、そう、一年半ほど前のことだったか。

文官の状況判断 そのいち（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の状況判断　　そのに

11 文官の状況判断　　そのに

当時、姉はまだ国王の婚約者だった。将来の王妃として彼女は様々な夜会に参加しており、ソナチネもアレグロの参加できないような場合はその付き添いとして出席していた。そして事件は姉妹二人で招待された、ある夜会で起きた。

「あら、誰かと思えばコン・フォーコ家のじゃじゃ馬ではないの」
まずは、標的である姉ではなくその妹に爆弾は投げつけられた。

声をかけたのは、派手なドレスに身を包み豪華な宝石類をつけたコン・ブリオ家の令嬢フェルマータであった。ソプラノと同一年で美しい黒髪を持つ艶麗な姫君だが、この日は少し様子がおかしかった。彼女の長年の横恋慕は有名だった。ソナチネの姉・ソプラノの婚約者である国王アレグロをなんとか自分のものとしようとなりふりかまわず行動していたので、王都の庶民でさえそのことを噂するほどだった。

両親であるコン・ブリオ家の当主夫妻は、娘の行状を諫めるでもなく放置していた。本来なら、フェルマータとて大貴族の令嬢だ、早い段階で適当な相手と娶わせるべきであろうに。

一方、ソプラノだって鬼ではない。何より婚約破棄をソプラノ本人が望んでやまなかったのだから、さっさと譲ってしまえばよかったのだが、フェルマータその人に問題があった。

淑やかに手に持った扇で口元を隠し、罵るフェルマータ。

「いつ見ても、貴族にふさわしくない無骨で貧相な格好ね。まった

く、こんな妹を放置するソプラノにも呆れるわね。国王陛下だって、婚約者の妹がこんなのでは恥ずかしいでしょうよ」

性格が悪いのだ。ついでに口も。何とか国王を手に入れようと努力するのはいいのだが、彼女の場合ひたすら敵 すなわちソプラノを攻撃する形となっている。

ことあるごとに悪評をふれ回られたり面と向かって罵られることにソプラノは苛立った。フェルマータと違い体面を気にする性質であった彼女は表立って対立することはできず、いつも言い返さずに笑顔でかわすばかりだったからだ。そんな理由もあって素直に婚約破棄をしてフェルマータを喜ばせることは願い下げだった。

恋敵を罵るフェルマータ嬢とそれを僂げな笑顔でかわすソプラノ嬢。

そんな評判がたち、評価の落ちたフェルマータはさらに攻撃を増した。その対立が頂点に達したのが、この夜会であった。

* * *

「それで、気が付いたらフェルマータが姉上に飛びかかってたのよね」

今でもソナチネにはよくわからない。何故そこまでフェルマータが荒れていたのか。それまで普通に言葉をかわすだけであったのが（一方的な罵りだが）、突然フェルマータはソプラノめがけて飛び掛り、その頬に爪をかけようとしたのだ。横にいたソナチネだけではなくまわりにいた招待客も加勢して、ようやくフェルマータを抑えることに成功したが、それまで暴れに暴れた彼女のドレスも髪もめちゃくちゃだった。姉に怪我がないことが何よりだった。罵られて

いたこちらではなく、フェルマータがなぜ暴れなければならないのか。

「女の世界はわからん、が。ソプラノ様は完璧過ぎたんだろうよ」

「うーん。まあ、嫉妬だったのはわかるけど」

女性としても人としてもソプラノにはかなわない、そんな想いに追い詰められていたのだろうか。

「やっぱりあの件があるから、フェルマータ嬢を女王に、という話にはならないだろう」

案の定この事件の話は王都に広まり、父であるコン・ブリオ家当主はフェルマータを屋敷から出さなくなった。この一年半、彼女の姿はほとんど見られない。それはソプラノが婚約破棄しても、国王とコトネの結婚が発表されても同じだった。ソプラノと同じ年の彼女も立派な嫁き遅れの範疇なのに大丈夫なのだろうか、と自分もその範疇に入りつつあるソナチネは思わずにはいられない。

「でもそれならフェルマータの兄上様は？ 会ったことがないわ」

「俺も直接会ったことはないな。歳が離れているから今は30前くらいだったと思うが」

それなら国王として丁度良いのではないのだろうか。21歳のソナチネでは若輩だが、30前なら落ち着きも経験もそれなりに備わっていることだろう。女王より王の方がまわりの混乱も少なくてすむ。

「だが、あの人の噂を知らないのか？」

「うわさ?」

「ああ。あー、でもな、何の噂かは俺の口からは言えん。噂は噂だからな」

「何よ、そこまで言うておいて」

「噂を吹聴したりしたら、俺の品性が落ちる。とにかく、センツア様のことは気にしなくていい…本人も国王は願い下げだろうよ」

そんな風に言い切れるということは、その噂とやらはかなり確実性が高いのではないのだろうか。事実、コン・ブリオ家の長男・センツアが王位に相応しくない事情を抱えているのなら、ここで教えてくれてもいいのに、と腑に落ちないソナチネであった。

「まだ何かあったよな。そうそう、マルカート伯の思惑だろう。他の重臣たちも」

それほどまでに話を変え、さらには追い出したいのか、急いでソナチネの悩みを解消しようとするレジエロは早口で言った。

「伯爵のことは心配するな。評判通りの温厚な人物で大体合っている。確かに野心はあるだろうが、早いうちから女王にとりいっておいて今の地位を磐石にしようってところだろう」

「陛下が味方につけている他の重臣たちも似たようなもんだ。お前なら操りやすい、誰でもそう考えるだろ」

「…いつも思うんだけど、私ってまわりに馬鹿だと思われてない？」

そりゃ姉上ほど頭良くはないけどさあ。そこまで馬鹿じゃない、はず」

「そうか？今、馬鹿にした覚えはないけどな。そんなこと言ったか？」

「あれ？ そう？ 私の考えすぎ？」

自分で証明したようなものである。どこまでもバカ素直なソナチネに少しばかりの不安をおぼえるレジエロだった。

ついでに大臣一人ひとりの詳細まで噛み砕いて説明した。ソナチネにしてみれば、なんとなく思いつきで訪ねただけなのだが、思いの外、良い人物のところへ来たと言える。

ソナチネの目下の悩み、まわりの思惑などが少し把握できたが、知らぬ間に長く話し込んでいたおかげで時間の経過に気が付かなかった。

大方の話が終わった頃だった。

「…もう日が陰ってきてない？」

「ん？ もうこんな時間じゃないか！？ あああ、仕事が…」

ソナチネとて時間がない。いくら彼女でも舞踏会そのものをすっばかすつもりなどない。いつまでも逃げていてはいられない、立ち上がり急いで部屋を出ようとさっさと扉に手をかける。

「じゃ、ありがとう！… このお礼は必ず！…」

「えっ、おい。ちょっと」

散々つき合わせておきながらあっさりお礼を述べ去っていくソナチネに、レジエロの伸ばした手と言葉は届かなかった。ひっかき回すだけ回していった、突然の嵐のような幼馴染の訪問はようやく終わったのだった。

「…あれが女王か…」

暗くなりつつある仕事部屋に一人残されたレジエロは先行きに大いに不安を感じた。さらに「あいつ背ばっか高くなって…」とあまり身長差がなかったことにちょっとだけショックを受けるのだった。

文官の状況判断 そのに（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

くすりと笑える後書きって好きですが、中々浮かばないもんですね
…。

魔術師の申し込み（前書き）

魔術師とか出てきますが、魔法はカケラも関係ないです。
ひたすら会話と人間関係の描写に徹します。

魔術師の申し込み

12、魔術師の申し込み

レジェロの部屋を勢い良く飛び出したソナチネだったが、彼女にしては珍しく、この後どうするかちゃんと考えがあつて行動していた。

近衛の詰め所や騎士団の宿舎へ行くと、すぐに伯爵の迎えに捕まるのは目に見えている。今は捕まりたくないソナチネは、人目を避けながら自分の計画通りに動いた。

* * *

その夜、伯爵家の屋敷で開かれた舞踏会は招待主の心意気を示してか、個人で主催するものにしてなかなか盛大なものだった。飾られた花々は南国から特別に取り寄せた一級品、美しい音楽を奏でる楽団も一流どころである。伯爵邸の舞踏室、大広間や客間などが開放され廊下を挟んで一続きの会場として設えられている。代々続くマルカート伯の屋敷には歴史ある立派な調度品が揃い、踊ることに疲れてもそれらを鑑賞しているだけで楽しめる。

招待客は紳士貴顕や騎士候たちまで幅広く、また着飾った令嬢たちも混ざって華を添えている。彼らが集められた表向きの理由は伯爵夫妻の結婚記念日を祝うものなので、少々幅広すぎる感もあるが、現職の法務大臣の主催である、異を唱える者などいなかった。

招待客が揃い、舞踏室で一曲目のダンスが始まった頃、いきなり姿

を消して伯爵夫妻に非常に気を揉ませた影の主賓がようやく伯爵邸へと自らやってきた。

影の主賓 コン・フォーコ公爵令嬢ソナチネが会場に足を踏み入れたとき、その衣装を見て驚いた招待客が半分、驚かなかった招待客が半分だった。

ソナチネの衣装は非常によく似合っていた 白が基調で要所には青を配し、金のボタンの並ぶそれは、彼女の所属する第一騎士団の式典用の礼装である。顔を上げ、礼装用の白いブーツで颯爽と歩く彼女はどこから見ても凛々しい騎士である。

普通なら全員が驚くのだろうが、これがソナチネにとって夜会でのいつもの正装である。驚かなかったのはこの舞踏会が彼女の婿探し（？）であることを知らない一般の招待客や令嬢たち、驚いたのは彼女の婿候補として呼ばれた青年たちとその関係者及び伯爵邸の間である。それが丁度半々だったということだ。

ソナチネが舞踏室に入っても、しばらくは誰も声をかけなかった。主催者である伯爵夫妻は二人とも主催者として最初の一曲を踊っているところ、本来ならダンスが始まる前に婿候補を彼女の元へ紹介しておくはずだったのだがそれができなかった。

また、婿候補たちも騎士の礼装で来たソナチネに自らダンスの申し込みをかけることもできなかった。彼らの方は夜会服がほとんどだが、同じような服装をした人間をダンスへと誘えるものだろうか。

そんなソナチネに、夜会での恒例の行事が起きた。

「あ、あのソナチネ様。ご機嫌よう」

「ああ、これはアマービレ様ではありませんか。ご機嫌よう。今宵は楽しまれておいでですか？」

爽やかに、挨拶をしてきた顔見知りのご令嬢に笑顔をかえすソナチネ。その笑顔に頬を赤らめるのは可憐なご令嬢。

夜会でのソナチネはご令嬢たちの憧れの存在である。凜々しく整った顔立ち、騎士の正装の映える細身の長身、さらにいつも紳士的な態度が崩れず優しい。そして何より同性であることは、特に若く初心な令嬢たちの心の垣根を取っ払いやすい。

最終的に、ついたあだ名が「白銀の騎士様」だ。ソナチネの銀髪と白い正装からついた、ご令嬢たち憧れの男装の麗人の呼び名である。

一人が勇気を出して声をかけると、あとはぞろぞろと湧いてくる。あつという間に、パートナーそつちのけとなつたご令嬢たちに囲まれたソナチネはますますダンスに誘いづらい存在となる。その姿はむしろ男性たちの羨望の的だった。

しばらくは4、5人のご令嬢たちに囲まれ、ダンスに参加することもなく隅に置かれた長椅子で談笑していたソナチネだった。が、ふと顔を上げるとここにいるはずのない人物を見かけた気がして、思わず輪の中から出てしまった。そこへご令嬢のものではない声がかかる。

「不躰なお願いなのは承知していますが、少しお話できませんでしょうか？」

心の中で舌打ちし、声に振り返る。せつかく作つたご令嬢たちの壁を自分からできてしまった。

そんな内心を覆い隠し、（ソナチネにだってそのくらいはできる）

声の主、歳の頃は20代半ばくらいの青年に向き合った。

「ああ、これはご無礼を。本当はマルカート伯爵に紹介いただく予定だったのですが、伯爵は多忙なようでした。自分で紹介させていただきます。私は宮廷魔術師を勤めます、ヴィーデ・スピリトーズと申します。以後お見知りおきを」

口で言っているほど遠慮の色のない、余裕さえ見られる笑みで挨拶した度胸のある青年・ヴィーデを見て、ソナチネは驚いた。

(すごい!!!これは陛下以上なのでは...)

国王アレグロや美女と名高い姉のおかげでソナチネは美形に耐性がある。ヴィーデはそんなソナチネをして目を見張らせるほどの超絶美形である。濡れたような輝きを放つ黒い髪は肩下までのばされ、瞳は煙るような灰色の入った紫、白皙の顔は達人によって彫刻された一級品の芸術であろうかというほど完璧な男性的美をかたどっている。その低い声までもが心地よく響いて美しい。

ここで彼がソナチネの手をとり、口付けでもして見せたら大した見世物となっただろうが、そこまで気取るつもりはないらしい。そんなことをされたら彼女だって全力で引いただろうし。

「魔術師でいらつしやる？ あ、えー私はソナチネです。ソナチネ・コン・フォーコです」

思わず聞き返してから、我にかえり自分も名乗る。

「ああ、もちろん存じていますよ。それに、私は真正正銘、宮廷に仕える魔術師です。と言っても、ここに杖はないので証明できませんが。伯爵もいませんし」

その美貌で朗らかな態度に出られると、なかなか圧倒されてしまうものがある。

「あの、いえ、疑ったわけではなく。失礼いたしました。それで……？」

「もちろん、一曲お相手願えないかと。いかかでしょうか？」

余裕の美形さんは、少々あせるソナチネに追い討ちをかけるような言葉を発する。

彼女は動揺を表に出さないようなんとか踏み止まっているつもりだが、突然始まった二人のやりとりを、固唾を呑んで見守っていたご令嬢たちが一気に色めきたったので本人の努力はあまり報われなかった。

つまり、ソナチネが舞踏会で異性からダンスに誘われたのは、本当にこれが初めてのことだったのだ。

これまで姉についてさまざまは夜会に出席していながら、ソナチネは舞踏会へ女性用のドレスで行ったことはなかった。何しろ自分のお披露目でもズボンだったのだ。

その代わり、女性と踊ったことなら何度もあった。ソナチネから誘ったのではなく、いつも勇気を振り絞ったご令嬢から声をかけられる。そんなとき、彼女は愛らしいご令嬢たちに目を細めながら相手をする。

「……私がかまいませんが」

嘘である。

とてもかまう。ソナチネはいつも女性とばかり踊るので、男性パートナーなら自信があるのだが、女性パートナーとなると最初に舞踏の教師に

ついで習って以来踊っていない。だが、ここでそれをヴィーデに告げるわけにもいくまい。しかし、彼は本気で騎士の服を着た人間と踊るつもりなのだろうか。

ええい、なるようになる！と破れかぶれとなりながら差し延べられた手をとろうとしたソナチネに、救いの神が現れた。

「ソナチネ様！こちらにいらっしやっただのですね。お出迎えもせずに申し訳ありません」

忘れかけていたが、今回の主催者マルカート伯爵夫妻がようやくダンスの輪を抜け、ソナチネのもとへとやってきた。遅刻し、勝手にやっていたソナチネが悪いのだから、彼らが謝る点はどこにもない。

「とんでもありません！遅れた私が謝罪しなければならぬところです。せつかく色々をご用意いただきましたに……」

救いの神に、ドレスやら装飾品やらの準備の件も込めて恐る恐るといった体で謝る。確信犯だったのだからもう少し堂々としているべきではないだろうか。

「まあ、ソナチネ様。お気になさらずに。また次の機会がありますわ」

伯爵夫人の最後の一言に戦慄をおぼえるソナチネ。

「それで、ソナチネ様はもうスピリトーゾ君と会われたのですね。ほら、例の件の一人ですよ、彼は」

伯爵の言葉の後半はソナチネ一人へ密かな声で告げられた。婿候補

という意味だろうが、さすがにソナチネにだつてわかつてきている。やっぱり私バカだと思われてない？と知らない方向へ思考を向けていたソナチネに無情な声突き刺さった。

「どうやら邪魔をしてしまったようです。どうぞお二人でお楽しみください」

救いの神が降り立ったのはほんの一瞬であつたらしく、気を利かした伯爵夫妻はあつと言つ間に別室へと消えた。

先ほどの危機的状況は何も変わっていなかった。

横合いから声をかけられ少し調子を崩してしまつたが、再びダンスを申し込むヴィーデに、今度こそ大人しく手をとられるソナチネだった。

「…もう少し楽しんで下さつたらいいですよ。エスコートは私の役目です」

ダンスが始まつてしばらく経つたところで、ヴィーデが話しかけた。はたから見ると奇妙な二人組である。ソナチネはその衣装と耳のあたりまでしかない髪の毛のせいで男にしか見えず、まるでヴィーデと二人、男同士で踊っているようなのだ。そのせいで周囲の視線を集めてしまい、彼女の慣れない女性パートでの踊りはますます覚束ないものとなっている。踊っているとは思えないほど、足がついていない。

「…申し訳ありません。足だけは踏まないように気をつけます」

こうなると完全に赤面してしまい、いたたまれないソナチネは普段の彼女からは考えられないぐらいの小さな声で詫びる。緊張のあまり、喉までうまく機能してくれない。

「いえ、大丈夫です。…失礼なことをおきしますが、ダンスは不得手で？」

むしろ少し上機嫌となったヴィーデが尋ねた。彼は長身のソナチネよりもさらに背が高い。彼の目には俯いた彼女のつむじが見えるだけで、その姿は彼が前評判として聞いていた「白銀の騎士」というあだ名からは想像すらしなかったものだった。初対面の彼は彼女を「こんなに緊張しているとは、純情で可憐な姫君ではないか」と何か違う方向へ印象を抱いたのだった。

余談だが、ヴィーデの方もなかなかすつとぼけた人物だ。彼はいつも己の美貌が視線を集めることに慣れているためか、自分たちが周囲の注目を引く理由をあまり深く考えてはいなかった。いつもと違い相手のドレスに躓く心配がないことも、ソナチネの手が剣だこで硬くなっていることも、甘い香水の香りが漂ってこないことにも普通なら違和感を感じるはずなのだが。

「いいえ、そういうわけではないんです」

女性パートが苦手なだけです、とは心の中の言葉だ。

「ところで、ソナチネ様は私がお誘いした理由はご承知ですよね？」
ダンスのステップを合わせることに必死のソナチネだが、その言葉に早速おいでなすったか、と身構える。

「承知しているつもりです。あの、ヴィーデ様はどうお考えですか？おかしな話だとは思われませんか？陛下のことです」

状況に負けていられない、とばかりに強く尋ね返す。

「ああ…。私は宮廷魔術師だと申し上げましたね？実は陛下の魔術の完成に微力ながらもお手伝いさせていただいたのです」

おかしなことだと思っていたら手伝いなどしませんよ、と言外に伝えてくる。

「…では？」

「はい。もちろん、名乗りを上げさせていただくためにこうしているのです」

ここぞ、とばかりに効果音さえつきそうな破壊力抜群の美形の微笑みでソナチネの顔を覗き込むヴィーデ、さすがの彼女も元から紅潮した顔がさらに温度を上げていくのを感じた。このまま腰砕けになつてしまふような自分を、鍛えた筋肉と騎士の根性がなんとか支える。

(どど、どどしよう。心臓苦しい。え、何、恋に落ちたとか？私は面食いだっただの!?)

経験したことの無い動悸が胸を襲う。いや、いくらなんでもだめだ。婿候補が美形だったので決めたとか、恥ずかしすぎる。

「少し、私自身のことをお話してもよろしいでしょうか？私の両親は幼い頃に亡くなり北の地方の孤児院で育ったのですが、12歳の

とき現在の師に見出され、魔術の修行を始めました。今は魔術師長のもとで、魔族との間で共同で魔術の研究を行う計画がありその調整役を務めさせていただいています」

すでにダンスどころではないソナチネを置き去りに、自己紹介を続けるヴィーデ。相手の空気を読んでないあたり、やはり彼は大物だ。しかし、これで調整役が務まるのだろうかと心配にもなる。

「今は国内におりますが、魔族との連携が本格的になりましたら、行ったり来たり生活になるかもしれません」

上機嫌のまま話すヴィーデは、そうはなっても決してソナチネ様に淋しい思いなどさせませんよ、安心させるように笑った。

再び動悸が激しくなるソナチネだが、それでもふと疑問がわく。

「そういえば、先の魔族との戦争のときにはどうされていたのですか？」

魔術師なら、一緒に従軍していたのではないのだろうか。しかしヴィーデの容姿なら話題にならにはずもないのに一度も彼の名をきいた覚えがない。

途端に悲痛な表情を浮かべるヴィーデ。美形の苦しげな表情はそれだけで絵になる。

「実は魔族の侵攻が起こった当初の頃、私は西の地方の駐屯地にいたのです」

ここでダンス曲が一旦終了したのだが、話が途中だったのでヴィー

デの導きでひとまず二人で端の長椅子に落ち着いた。ソナチネは慣れないダンスがようやく終わり、話をきくことに専念できた。

そして、ヴィーデの話によると。

ヴィーデと、彼が派遣されていた西の防衛を担当する第三騎士団は当初、魔族の侵攻に対し不意打ちをくらった形だった。駐屯地が突然の攻撃にさらされた時、運悪く魔族の魔術の最初の一撃をくらったのがヴィーデ達だったそうだ。

「予想外のこととして、防御が間に合いませんでした…。私はこうして運良く生きていますが、一緒にいて亡くなった騎士の方もおられました…。私の責任です」

「そんな…不意打ちだったなら仕方がないです」

「いえ、それが事実です。しかしその時私は重傷を負いました。怪我を負った私を助けてくださった方がいて、すぐに王都へ送られました。その後は王都で怪我を治すことと、私の受けた魔族の魔術の特殊性を研究する役目をまかされたので掃討軍には従えず、ずっと王都にいたのです」

「しかし、失礼ですがそれでは今のお役目はおつらいのでは？魔族に…恨みはないのですか？」

「そうですね…親しくしていた騎士の友人を一人亡くしました。しばらくは彼のことを思い出して、申し訳ないといつも謝ってばかりでした」

その悲しみと後悔が消えたわけではないことが、抑えた表情から伺えた。

「しかし、友人は豪気な人間でした。いつまでも私が謝ってばかりいると死んだ彼が背中を叩きに来るぞ、と彼の奥方にも言われまして」
生前からそういう男だったもので、と儂げに笑う。

「私の中に魔族への恨みがないと言えば嘘になります……ですが、後ろばかり見ているのはやめようと思ひまして。魔術師長の命令を受け入れました」

あれで彼らはけっこう普通の人間と変わらない感覚を持っているのですよ、と締めくくって笑った。

話が終わったヴィーデは「いつまでもあなたを独占しては恨まれますから」といつてあつさり別室へ下がっていった。だが、最後に「私の気持ちは真剣です」と跪いてソナチネの手を握り、彼女の顔を再び真っ赤に染めていった。

魔術師の申し込み（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

文官の言い訳

13・文官の言い訳

ヴィーデが言っていた通り、彼が誘ったことで勢いがついたのでその後のソナチネにはひっきりなしにダンスの申し込みがなされた。自分なりに仕組んだ防衛策も失敗したようだ。ソナチネは元来、運動神経の良い女性である。最初のはボロボロだったが、なんとか勘を取り戻し次々と現れるパートナーの相手をつまくはないが大過なく終えることができた。

十数人ほど踊っただろうか。体力のあるソナチネでもさすがに限界を感じ、またそろそろお開きの時間が近づいてきたこともあり、彼女は伯爵夫人に頼み少し休憩のできる部屋を用意してもらった。婿候補の顔見せはほぼ終わったのだから帰ってもよいのだろうが、その前に少し休みたかった。

通されたのは二階の客間の一室、冷たい物をお持ちしますわ、と案内してくれた侍女に言われ、部屋にあった寝椅子にソナチネはもたれ込んだ。

（疲れた…このまま寝てしまいたい。）

だが、病人でもあるまいし他人の屋敷で寝るわけにもいかない。

（でも、あんまり候補者たちも乗り気でないのがいたような…）

今までの婿候補たちのことを思い出す。

はつきり言って、最初に踊ったヴィーデ以外はあまり印象に残って

いない。まあ彼の後では誰も彼も霞んでも無理のない話なのだが。

（なんて言うか、外見も中身もいい人っぽいし。あんな人よく見つけてきたものだわ）

伯爵もヴィーデが一押しらしく、あの後も彼について何かと教えてくれた。

（それにあっちから断られちゃあなあ…）

他の候補者の中には踊りだした途端ソナチネの耳に飛んでもないことと囁いてくれた者もいた。「父には話していないが、自分には他に心に決めた相手がいる」ときたのだ。さすがに彼女も苦笑するしかない。

（重臣たちの関係者が多かった、かな？）

重臣の親類縁者が多かった。皆、文官だったのはソナチネが武官だからだろうか。重臣たちに後押しで来た者の中には本人は乗り気でないのでは、と思えた人物も先の彼だけではなく少なからずいたのだ。彼女にとってはこれまた失礼極まりない。

それでも本気で申し込んでいると見られる候補者たちはヴィーデを含んで4、5人はいただろうか。十数人から4、5人まで絞れたのだ、ソナチネにとっては楽になったと言えなくもない。

（それにしても、昼間に教えてもらっておいて助かった。あんなに次々紹介されても何がなんだかわからないもの）

重臣たちの力関係も、さらにいうとその名前も役職までもソナチネは疎い。レジエロの説明がなかったら、彼らの名前から誰の縁者なのだろうと推察することさえできなかった。

「ん？」

ガバリと寝椅子から起き上がる。今の今まで完全に頭から抜け落ちていたが、ソナチネをご令嬢たちの壁から抜け出させるきっかけとなった人物を忘れていた。

「お待たせいたしました。檸檬水をお持ちしましたわ」

丁度そこに入ってきた侍女に詰め寄る。

「招待客たちはまだいる!？」

「え、は、はい。お帰りになられた方も少しいらっしゃいますが…」

いきなり詰め寄られ、お盆を取り落としそうになりながらも、侍女は教えてくれた。

「ありがとう、すぐに戻ってくるから飲み物は置いてもらえませんか?悪いわね」

侍女の返事も聞かず、ソナチネは部屋を飛び出した。

* * *

もう帰ってしまったのではないかと思っただが、意外とまだいた。

「ちょっと、何でいるの」

「ちっ、帰る時間を誤ったな。…それで何か用か」

「来るなら来るで、何で昼間に言わないの!? あなたのせいで私はクタクタよっ」

昼間に散々世話になったレジェロである。伯爵邸のバルコニーに隠れるように手すりにもたれていた。確かに彼を見かけたせいでソナチネはご令嬢たちの壁を出してしまったのだが、それは別に彼の責任でもない。

ソナチネの言いがかりにムっとするレジェロは、昼間の妙な格好とはうって変わってきちんと男性用の夜会服を着込んでいた。つまり正式に招待された客の一人だということだ。

「悪いか。俺だって国王陛下の署名入りの招待状が来たら、出席しないわけにいくもんか。それに話す前にお前が出て行ったんだ」

「…それはつまり」

「言っとくけど、俺だって不本意だ。心配すんな、お前の邪魔はしないから」

レジェロの言葉に、バルコニーの手すりへがっくりと両手をつく。

「有能な青年達、かあ」

成る程、ソナチネの一つ年上、22歳にして文官として一つの部屋を与えられている待遇を鑑みるとレジェロは優秀なだろう。重臣たちに関してあれほど情報を持っていたことからそれは察せられる。その上彼は魔術師長とも交流があることで知られているのだ、見るところから見れば適任なのかもしれない。

「で、どうするんだ？」

さっきより何故か楽しげなレジエロがきく。

「今、きかれてもねえ」

一日で何を決めるといふのだろう。4、5人に絞ることはできるかもしれないが、本人が乗り気かどうかだけで決めていいのだろうか。

「ヴィーデのことだよ。あんなの中々いないぞ。はつきり言ってお前には勿体ない」

「彼のこと知ってるの!？」

再びカチンとくる言葉が最後にきたが、恐らく大本命の彼は事実勿体無いような人物なので言い返さない。そういえば、魔術師長と懇意なレジエロなら知っていてもおかしくはない。

「ああ。一年ほど前からだが。あんなだから他の女も放っておかないが、あれでけっこう硬いんだ。今のところ浮いた話もきかないな」

そりゃ、あの歳まで異性と関係がなかったなんてことはないだろうが、と付け加える。

「裏のあるような人間とも思えない…きいたかもしれないが、あいつは天涯孤独だ。口を挟んでくるような親類もないから身軽なもんだぞ」

「ふうん。そうか…天涯孤独かあ」

「大した後ろ立てもないのに、ここまで来たんだ。立派なもんだよ」
夜も更け、冷えてきたのかため息が白く曇る。多少ひねくれた所のあるレジエロが人を褒めるのは珍しい。

「へえ。レジエロが人を褒めるなんて珍しい。丸くなったのね」
そういうと、レジエロは苦笑した。

「俺だって本当に優秀なら認めるさ。何より憧れの魔術師様だ」
話は終わったのか、少し苦い顔つきで「じゃ、寒いから俺は帰る」
とレジエロはバルコニーを去った。

しばらくソナチネは一人でその場に残っていたが、客間に飲み物まで用意してもらったことを思い出し、あわてて部屋に戻った。舞踏会はいつの間にかお開きになったらしく、他の招待客は帰宅の準備に忙しかった。

文官の言い訳（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

不審者の告白（前書き）

緊迫するような雰囲気だけ、そんな話です。

不審者の告白

14・不審者の告白

マルカート伯爵邸を辞したソナチネは、馬に一人騎乗し帰宅の途につこうとしていた。

舞踏会に乗馬で来る公爵家の姫君というのも前代未聞だが、ソナチネの場合はよくあることなので、いまさらだ。愛馬であるアニマト号は王宮の第一騎士団の厩舎にいたので、今乗っているのは自宅であるコン・フォーコ公爵邸にいた馬だ。

夕方、レジエロの部屋を出たソナチネは人目につかないよう注意しながら、大昔に子供だった国王アレグロたちと偶然発見した王宮の抜け道へと向かった。庭園や建物の裏、井戸端などをぬってつけられた道を辿り、どうにか見つからずに王宮を抜けだすことに成功した彼女は王宮の内にある自宅へ帰ったのだ。姿をくramsしたことで、自宅へもすでに追っ手が来ているかと危惧していたのだが、幸いソナチネが王宮を出たことには気づいていないらしく、そこはいつもの閑散とした平和な場所のままだった。

自宅は現在の公爵である甥ラルゲットが母や祖母とともに領地へ引っ込んでいる上、ソプラノは嫁いで、ソナチネは騎士団の宿舎でほぼ寝泊りするので公爵家の人間は誰も住んでいないという状態になっている。

もちろん屋敷に人がいないのでは無用心であるし、建物や庭の世話をする必要もあるので管理人を置いてある。

ソナチネが今来ている騎士の正装は、その管理人夫婦の妻に繕いを頼んでいた物で、彼女はそれを着て舞踏会へ行けばご令嬢たちの壁

を作れることを思いつき実行したのだ。結局、失敗に終わったが。

馬を返さねばならないし、夜遅く王宮の宿舎まで帰るのも面倒なのでとりあえず自宅へ向かおうかと、伯爵邸の門を出たソナチネは馬を自宅の方向へと向けた。そこへ声をかける者がいた。男の声だ。

「ソナチネ嬢ですか？ソナチネ・コン・フォーコ嬢」

深夜にいきなり声をかけてきた者に対し、不審者かつ！と咄嗟に馬首を伯爵邸の方向へ巡らす。騎士とはいえ女一人、夜更けに声をかけてきた正体不明の相手の人数も目的もわからず対峙するのは無茶だ、騎乗しているのだから逃げるが得策である。

「お待ちください。不審な者でもあなたに害をなす者でもありません」

相手はソナチネによく見えるようランタンを持ち出し、自分の姿を照らした。伯爵邸の門の外に灯りを見た覚えはないから、覆いでもかけてあったのだろう。

「よく見てください。私は一人です。武装もしていません」

なるほど相手の言うとおり他の人影は見えず、ランタンを持っている以外は手ぶらであることが掲げた手からわかる。闇夜に浮かんできたのは男物の夜会服姿、冷えてきたでの外套なしでは相当寒いのではないだろうか。

しかし、相手がどんな武器を隠し持っているか定かでないし、仲間が隠れていないとも限らない。ソナチネは油断することなく大きな声で警告する。

「馬に蹴られたくなくば、その場を動くな!!」

「おや、それは痛そうだ。では動きませんので、よくご覧ください」

どこかおかしそうな柔らかい声で相手は答えた。先ほどの警告の声が伯爵邸の門番に聞こえていれば出てきてくれるだろう。新手がないか周囲に気を払いながらも、男の姿を観察した。

夜会服姿だが、かぶっていた帽子をとったので見えるようになった顔は先ほどの舞踏会で見かけた覚えはなかった。風采は悪くはなく、外套を着ていない不自然さ以外は普通の貴族の青年に見える。歳は30前くらいだろうか、髪色は暗く夜の闇に沈んでいる。

「何者だつ、答えよ」

そう簡単に名乗るとはソナチネとて考えていないが、助けを呼ぶ意味で再び大きな声を出す。

「私の名を聞けば、驚くと思いますよ。何しろあなたと同じ渦中の人物だ。私はセンツァ、センツァ・コン・ブリオです」

確かに驚いた。だが、そんな言葉に信用のおけるはずもない。

「…言うに事欠いて、公爵家を名乗るか!!センツァ様が何ゆえこのようなところにいるというのだ!!」

「いやあ、それが本当にこのようなところ立っているのです。信じてください、ほら」

男は懐から出した何かをソナチネへ向けて放った。飛び道具かとソ

ナチネは馬ごと避ける。

「見てください。別に爆発したりしませんから」

投げられたそれは月明かりをよく反射し、小さな物であるにもかかわらず夜闇に紛れてしまうことはなかった。それは小さな金属製の何かで、宝石が散りばめられているらしい。

だが、馬上からかるうじてわかるのはそれだけだ。馬から降りた途端襲われることも考えられるのでこれ以上近づきようもない。

そこへようやく救援が現れた。

「ソナチネ様っ!!」

伯爵本人が屋敷の男手を連れてやってきた。だが、伯爵はランタンを持つ不審者の顔を見て、驚愕の声を上げる。ナイスミドルがかなり乱れてしまっている

「っ！ センツア様ですか!? 一体ここで何を!？」

「えっ!!」

信じられないその言葉に、ソナチネも二の句が継げない。

「ほら、言ったとおりでしょう? 困りましたね、ひっそりお会いしたかったのですが」

人物証明ができたことを当然のことと受け入れ、なぜか残念そうな不審者 コン・ブリオ公爵家の嫡男・センツア はゆっくりソナチネに歩み寄った。

センツアはソナチネの馬を刺激しないようゆったりとした動作で先ほど投げた物を拾った。

「見てください」

柔らかな顔に笑顔を浮かべて、その小さな物をソナチネに差し出した。

「これは…」

それはペンダントトップだった。だが普通の品ではない、金の台座の上にコン・ブリオ家の紋章が宝石で描かれた、お金も手間も相当かかっているだろうと伺わせる逸品である。

なるほどこれを持つ人間は限られるだろう。盗品でなければの話だが。

「こんな時間に何ゆえ我が屋敷の前にいらっしゃるのです？」

そこへ伯爵から当然の質問がセンツアへ向けられる。伯爵は顔見知りらしく、既に警戒は解いているがかなり訝しげだ。

「こちらのソナチネ様にお話がありましたね。妹のせいで、普通に訪ねても門前払いをくらいそうなので、会えそうな場所に来てみたのです」

センツアはコン・フォーコ家の姉妹とは因縁深いフェルマータの実兄である。確かに訪ねて来てもそう簡単に会おうとは思わないかもしれない。

「ですが…。」

「伯爵、こちらは本当にセンツア様なのですか？」

「面識はございませんでしたか？その通りです、我が家はコン・ブリオ公爵家とは少々縁がありました、センツア様とも何度もお会いしたことがあります」

伯爵のおかげで腰の剣を抜く前に知れてよかった、こっそりため息をついたソナチネだった。彼の意図がよくわからないが、確かに彼は渦中の人物だ。その考え 他の人間が誰も彼を国王に推さない理由を知りたくもある。

ソナチネは馬を降りるとセンツアに向き直った。

「知らぬことはいえ、ご無礼をいたしました。それで、お話とは？」

「いやあ、本当に騎士の方なのです。凛々しくいらっしゃる。対するセンツアは、ソナチネの颯爽と馬を降りる仕草や、その前の勇ましい態度を思い妙に感心してみせている。」

「そうそう、お話があるのです。ここで話しますか？私の現在の自宅がよいでしょうか？それともフォーコ家へご厄介になっても？」

「ソナチネ様、部屋は我が屋敷にご用意いたします。センツア様も、時間が時間なのです、若い女性を連れまわすものではありませんよ。あわてて割って入った伯爵によって、ソナチネはさつきぐったばかりの伯爵邸の門を逆戻りした。今夜は眠れるのだろうか、と頭の

端で考えなくてもなかった。

* * *

伯爵邸の客間の一室にいるのは三人、ソナチネとマルカート伯、セ
ンツァである。

「伯爵、部屋をお借りしておいて図々しいことをお願いしますが、
ソナチネ様と二人きりにしていただくわけには参りませんか？」

「しかし…」

これまでの行動が十分非常識だった相手の申し出に、ソナチネの安
全が心配になったのか、それとも二人きりで何を言い出すのか不安
なのか伯爵は逡巡する。

「私は大丈夫です。ご心配なく」

伯爵の視線を受け、腰に挿したままの剣をさりげなく示して請け合
うソナチネ。相手が丸腰の上、その身のこなしから特に武術などを
嗜む様子のないことを看破していたので彼女には自信があった。

伯爵はしぶしぶ部屋を出て行った。

「伯爵のおっしゃる通り、時間も時間だ。手短にお話しましょうね」
フェルマータも外見はあれでなかなかの美女と評判である。その兄
センツァも整った容姿の持ち主であった。だが、その柔和な顔立ち
には妹にはない温かみがあった。それでも彼女の兄だ、油断はでき

ない。

「私には王位につくことのできない事情があります。が、それを第三者に説明させては誤解や行き違いが起きないとも限らない、そういうわけで自ら説明しに参ったのです」

もうすでに、センツアの話に何の期待も寄せてはいなかったソナチネだが、それでもその肩が少し落ちる。

「……納得したわけではありませんが、わかりました。続きをどうぞ」

「なかなか苦労されているようですね。お察しします」

苦笑を浮かべたセンツアだが、すぐに表情を真剣なものに改める。

「私には現在、大切にしている生活と、大切にしている人がいます」

「私は彼と二人で生きることを選び、既に家を出ました。ブリオ家は妹が継ぎます。父も今では私を無いものと扱っています」

「……………彼？　というと？」

何だろう、友達だろうか、それとも外に作った息子とか？

意味のわかっていないソナチネに噛んで含めるように言い直すセンツア。繰り返すが彼は真剣だ。

「私の恋人です。私は同性しか愛せないのです」

「……………っ！！」

驚愕で言葉を発せないソナチネ、大声を出さなかったことを褒めてほしいと思った。あまりに告白に無意識に身を引いてしまう。

そりゃ、誰も説明をしたかないわ、と頭のどこかで納得した。

不審者の告白（後書き）

お約束ですね。

読んでくださってありがとうございます。

国王の訪問（前書き）

底にあるのは軽いノリだけです。
そういうわけでここで早速折り返しです。

国王の訪問

15・国王の訪問

その夜は、結局伯爵邸で泊めてもらったソナチネは、翌朝まだ暗いうちに自宅であるコン・フォーコ公邸へと帰った。帰り際、朦朧としていた彼女に伯爵が「ソナチネ様はしばらく休暇扱いになります」と伝えてきたので急いで帰る必要もなかったのだが。

（そんな、もう仕事にも来るなってこと？　もう私は騎士ではないの？）

このまま、流されるように女王にされてしまうのだろうか。

暗澹たる思いを抱え、朝早く、ソナチネはようやく自宅へ帰ることができた。

ひどい顔をしてやっと帰ってきた令嬢の姿に、公爵邸の管理人であるカランド夫妻はおおいに慌て、ソナチネの世話を焼いてくれた。彼女が生まれる以前より公爵家に仕えている人たちである、幼い頃から実の子供のように可愛がってくれている。

しばらく王宮へ行かなくてもよいことを伝えると、カランド夫人より「では、しばらくお休みくださいませ」と強制的に自室の寝台へと押し込まれてしまい、疲労困憊であることは昨夜から自覚することであったソナチネは素直にその言葉に従った。

* * *

「ネネ様、ネネ様」

慣れた寝台の中で深く眠りにつき、中々覚醒しないソナチネに優しいが無を言わさぬ声でその幼な名を呼ぶ者がいる。慣れ親しんだ自分の寝台というのはそれだけで安らぎの象徴だ、そう簡単に起きる気配もない。

「ソナチネ様！ 起きないとグラーヴェ先生からお説教ですよ！！」

昔の家庭教師の名前を出され、一気に目が覚めたソナチネはガバリと体を起こす。

「え！？ え！？ グラーヴェ先生が！？ 今日授業！？」

ソナチネとソプラノの家庭教師だったグラーヴェ女史は、非常に厳しいことで有名だった。優秀な姉と比べると、普通よりも少し鈍いかな？という程度で、勉強よりの外で体を動かすことの好きなソナチネはよく授業を抜け出したので頻繁にお説教をされた。一度など逃げようとしたソナチネを捕まえた女史は、彼女を一日中正座させたまにお説教を垂れた。声を荒げるわけでもネチネチと絡むわけでもないが、延々と正論を叩き込まれたソナチネはその日以来まだに女史が恐ろしい。

そんな懐かしい思い出の名前を使ってソナチネを起こしたカランド夫人は、混乱し子供時代の頭に戻りかけた彼女を現実へと戻し、さらにどん底へとつき落とす。

「ソナチネ様！ 大変です！ 国王陛下がこちらにいらっしやると、

使いの者が来ていました!!」

「なんで!? もうやだ !!!」

* * *

起きた当初は完全に取り乱したソナチネだが、なんとか国王その人を迎えるに相応しいよう、身支度を整えた。といっても公爵令嬢らしいドレスに着替えるわけでもなく、白いシャツに細身のズボンという小姓の平服のような格好だ。不敬かもしれないが、相手が「お忍び」なのだ。正装でなくとも文句は言えまい。

午前中に来た国王の使者はソナチネがまだ寝ていることを伝えると「では昼食後になさるよう陛下に申し上げておきます。」と言い置いていったそうだ。起きていたらすぐにも来ていたのかもしれない。ソナチネが起こされたのは昼食前、その後急いで湯浴みをしたり、昼食をとったりしたので忙しかった。

「この度の我が家へのご来臨、心より嬉しく存じます 」

現公爵は領地において使用人もほほいらない公爵邸だ、ソナチネ自ら本当にやって来た国王アレグロを出迎えた。

「ああ、堅苦しい挨拶はよい。ここはそなたの家ではないか、楽にせよ」

アレグロは美しい顔に笑顔を浮かべて、軽く手を振り公爵邸側のもてなしは不要と伝えてきた。

「突然やって来てすまないが、例の件で少々打ち合わせておきたい

ことがあってね。ソナチネが今日から王宮に来ないことを思い出したので私の方で訪ねたのだ」

公爵邸の厳格な雰囲気の漂う応接室に落ち着いた二人だった。アレグロにはもちろん近衛がついていたのだが、今は部屋の外へと追いやられている。

「…お呼びいただければ、参上しましたが」

むしろこんな風にいきなり訪ねて来られると心臓が悪い。察してほしい。

「頼みごとをするのだ。私から出向くのは当然だ」

その頼みごとの内容を思うと、逃げ出したくなるのは仕方のない話だ。黙ったままのソナチネにかまわず、国王は続けた。

「一月後に私の退位式を行う。そなたも知つての通り、わが国では国王は一度即位すれば死ぬまで国王だ。退位した国王などこれまではいなかった。…私が退位した最初の国王ということになる」

今日も麗しい声に自嘲がにじむ。

「だが、私の退位は悪しき習いとなると言えなくもない。よって、これから開く議会で私は退位を宣言するが、それはこの一回限りの特別な処置とする、と王室典範に記載させるつもりだ。ここまで理解はできたか？」

「つまり、陛下が退位した最初で最後の例となる、と？」

「そうだ。私の例を引き合いに出され、そなたが即位後に何かあって退位を迫られても困るであろう?」

「え? いえ私は困りませんが…」

辞めてもいいと言ってもらえるなら、これほど気楽なこともない。

「王の足元がぐらついていては、国のためにならん」

美しいその顔で渋面を作る。国を思う気持ちまで失せたわけではないらしい。

「そなたには、私が退位式を終えたらすぐに即位式を挙げてほしい… ついでに結婚式も」

「…恐れながら、子供の頃、私は陛下を友達だと思っておりました」

すでに驚くことに慣れてしまったソナチネは、落ち着いていた。「ご無礼をお許してください」と続ける。

「しかし、陛下がお父上を早く亡くされて今の私よりも若くに即位され、遠い方になってしまわれました。ですが…陛下はご立派に国を治めておいでです。魔族の侵攻が起きたときも、その後の交渉時も陛下が国王で良かったとどれだけ思ったか!! …私はその陛下にお仕えできて本当に幸せだと思っておりました。今でもそうです」

「ありがとう…それで?」

「私には無理です。何度でも申し上げます。どうか…私たちをお見捨てにならないください…!!」

座っていた長椅子から立ち上がり、頭を深く下げるソナチネ。
だが。

「……………すまない」

永遠かと思われる長い沈黙のあと、苦しげな声が落とされた。

国王の訪問（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5445z/>

消えた王妃と白銀の騎士

2011年12月19日00時49分発行